テニスクラブ建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

多肥宮尻遺跡

2018年6月

高松市教育委員会
株式会社　ＧＧＰ

例　言

１　本書は、多肥上町テニスクラブ建設工事に伴う埋蔵文化財報告書であり、多肥宮尻遺跡の報告を収録した。

２　発掘調査地ならびに調査期間は次のとおりである。
　調査地　：高松市多肥上町
　発掘調査：平成２９年４月２４日～５月１７日（実働１５日）
　整理作業：平成２９年６月１日～平成３０年６月２９日
　調査面積：５９４㎡

３　発掘調査から報告書の編集まで高松市教育委員会が担当し、それらの費用は株式会社ＧＧＰが負担した。

４　発掘調査及び整理作業は地方自治法第１８０条による補助執行により、高松市創造都市推進局文化・観光・スポーツ部文化財課文化財専門員　香川将慶、高上拓、梶原慎司、渡邊誠及び同課非常勤嘱託職員　益﨑卓己、中西克也、上原ふみ、大迫敏美、三輪望が担当した。報告書の整理・原稿執筆は香川、益﨑が担当した。

５　本書の編集は香川、益﨑が担当し、非常勤嘱託職員　森原奈々がこれを補佐した。

６　本調査に関連して、以下の業務を委託発注により実施した。
　遺物写真撮影　西大寺フォト

７　発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。

８　標高は東京湾平均海面高度を基準とし、座標は国土座標第Ⅳ系（世界測地系）、方位は座標北を表す。

９　出土遺物の実測図は、土器1/４、石器1/２、遺構の縮尺は図面ごとに示している。

１０　各遺構番号は、１面目で１０○○、２面で２０○○と表示する。

１１　今回の報告で土器の編年や併行関係を求めた資料は以下のものでそれぞれの形式名を引用している。
　香川県教育委員会　１９９１『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ-下川津遺跡-』
　信里芳紀　２００２「讃岐地域における弥生時代前期から中期前半の様相」『第１６回古代学協会四国支部研究会　弥生時代前期末・中期初頭の動態』古代学協会四国支部
　信里芳紀　２００５「讃岐地方における弥生中期から後期初頭の土器編年 - 凹線文期を中心にして - 」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅰ』香川県埋蔵文化財センター
　片桐孝浩　２００６『小山・南谷遺跡Ⅱ』香川県教育委員会

多肥宮尻遺跡

本　文　目　次

例言

第1章　調査の経緯と経過…… 1

第１節　調査の経緯…… 1

第２節　調査の経過…… 1

第2章　地理的・歴史的環境 …… 2

第１節　地理的環境…… 2

第２節　歴史的環境 …… 2

第3章　調査の成果 …… 5

第１節　試掘調査の成果…… 5

第２節　調査の概要と基本土層…… 5

第３節　第１調査区の遺構・遺物…… 6

第４節　第２調査区の遺構・遺物…… 19

第５節　第３調査区の遺構・遺物…… 31

第６節　第４調査区の遺構・遺物…… 34

第７節　第５調査区の遺構・遺物…… 42

第4章　まとめ ……46

第１節　遺構の変遷…… 46

第２節　ＳＫ１０１２の土器焼成遺構の可能性について…… 46

第３節　多肥宮尻遺跡周辺の流路跡について…… 47

第４節　まとめ…… 49

観察表

写真図版

報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　周辺発掘調査地位置図…… 3
第２図　遺構配置図（１面目）…… 7
第３図　遺構配置図（２面目）…… 9
第４図　第１調査区　１・２面目平面図・土層図…… 11
第５図　第１調査区　ＳＨ平断面図・出土遺物… 13
第６図　第１調査区　ＳＫ平断面図・出土遺物… 15
第７図　第１調査区　ＳＰ平断面図…… 17
第８図　第１調査区　ＳＤ・ＳＫ平断面図…… 18
第９図　第１調査区　ＳＫ・ＳＰ平断面図…… 19
第10図　第２調査区　１・２面目平面図・土層図…… 21
第11図　第２調査区　ＳＲ 1001 平断面図・出土遺物 …… 23
第12図　第２調査区　ＳＲ 1002 平断面図…… 25
第13図　第２調査区　ＳＲ 1002 出土遺物①…… 26
第14図　第２調査区　ＳＲ 1002 出土遺物②…… 27
第15図　第２調査区　ＳＲ 1002 出土遺物③…… 28
第16図　第２調査区　ＳＫ平断面図・出土遺物　30
第17図　第２調査区　ＳＰ平断面図・出土遺物・遺構検出治時出土遺物 …… 31
第18図　第３調査区　遺構配置図（１・２・３面目）…… 32
第19図　第３調査区　ＳＰ平断面図・出土遺物・遺構検出治時出土遺物 …… 33
第20図　第４・５調査区　１面目平面図 …… 35
第21図　第５調査区　断面図 …… 37
第22図　第４調査区　ＳＲ 1002 平断面図…… 38
第23図　第４調査区　ＳＲ 1002 出土遺物…… 39
第24図　第４調査区　ＳＰ・ＳＤ平断面図 …… 41
第25図　第５調査区　ＳＲ 1002 出土遺物…… 43
第26図　第５調査区　ＳＫ平断面図・出土遺物　44
第27図　第５調査区　包含層出土遺物 …… 45
第28図　第５調査区　遺構検出時出土遺物 …… 45
第29図　表採遺物 …… 45
第30図　周辺遺跡流路位置図 …… 48

挿　表　目　次

第１表　遺物観察表①…… 51
第２表　遺物観察表②…… 52
第３表　遺物観察表③…… 53
第４表　遺物観察表④…… 54
第５表　遺物観察表⑤…… 55
第６表　遺物観察表⑥…… 56

写　真　図　版　目　次

写真図版１

1　第１調査区１面目（東から）
2　ＳＫ 1002 断面（南から）
3　ＳＫ 1002 全景（南から）
4　ＳＫ 1008 断面（南から）
5　ＳＫ 1009 断面（南から）
6　ＳＫ 1012 遺物出土状況（北から）
7　ＳＫ 1012 断面（北から）
8　ＳＫ 1012 完掘（北から）

写真図版２

1　ＳＰ 1001 断面（北から）
2　ＳＰ 1003 断面（南から）
3　ＳＰ 1003 完掘（南から）
4　ＳＨ 1001 全景（南から）
5　第１調査区２面目全景（西から）
6　ＳＤ 2001 断面（南から）
7　ＳＤ 2001 完掘（西から）
8　ＳＫ 2001 完掘（北から）

写真図版３

1　第１調査区Ａ－Ａ’断面（北から）
2　第２調査区１面目（西から）
3　ＳＲ 1001 完掘（南から）
4　ＳＲ第２調査区 1002 断面（北から）
5　ＳＲ第２調査区 1002 完掘（南東から）
6　ＳＫ 1014 断面（南から）
7　ＳＫ 1016 断面（北から）
8　ＳＫ 1016 遺物出土状況

写真図版４

1　ＳＫ 2003 完掘（北東から）
2　第２調査区Ｃ－Ｃ’断面（西から）
3　第３調査区１面目（西から）
4　第３調査区包含層１断面（南から）
5　ＳＰ 1017 完掘（南から）
6　第３調査区３面目全景（西から）
7　第４調査区１面目全景（北から）
8　第４調査区土層（西から）

写真図版５

1　ＳＲ第４調査区 1002 完掘（南東から）
2　ＳＫ 1017 遺物出土状況
3　ＳＫ 1017 完掘（北から）
4　第５調査区包含層１完掘（北から）
5　第５調査区基本土層（東から）

写真図版６

1　ＳＫ 1012 出土遺物
2　ＳＲ 1002 弥生土器甕①
3　ＳＲ 1002 第６層出土遺物
4　ＳＲ 1002 弥生土器
5　ＳＲ 1002 第４層出土遺物
6　ＳＲ 1002 石器・須恵器
7　ＳＲ 1002 弥生土器甕②
8　ＳＫ 1001 出土遺物

写真図版７

1　ＳＫ 1016 弥生土器　甕
2　出土遺物一括
3　焼成破裂を受けた土器片

第1章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯

事業者からテニスクラブ建設工事に伴い事業地における埋蔵文化財の照会があった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地外であったが、多肥宮尻遺跡や空港跡地遺跡に隣接し、その集落域が広がっている可能性が考えられた。事業者と協議を行った結果、任意の協力による事前の試掘調査を実施することで合意した。平成２８年１１月７、８日に試掘調査を実施し、埋蔵文化財の包蔵状況を確認した。高松市教育委員会は結果を１１月１４日付けで香川県教育委員会と事業者に報告し、同日付けで香川県教育委員会から事業地全体を周知の埋蔵文化財「多肥宮尻遺跡」に追加登録する旨の通知があった。

これを受け、１１月２２日に事業者から造成に関する工事について文化財保護法第９３条第１項に基づく発掘届出が提出され、高松市教育委員会から香川県教育委員会へ進達したところ、１２月２７日付けで「工事立会」の行政指導があり、実施した。また平成２９年１月２７日に事業者から建設工事に関する工事について再度文化財保護法９３条第１項に基づく発掘届出が提出され、香川県教育委員会に進達したところ、２月１０日付けで「工事立会」の行政指導があり、実施した。その後、４月２１日付けで建物基礎部分の開発について設計変更等があり、新たに文化財保護法９３条第１項に基づく発掘届出が提出され、進達を行った結果、遺跡の保護が図れないことから発掘調査の行政指導がなされた。

これを受け、高松市教育委員会は事業者と協議を行い、工事着手前に発掘調査を実施することで合意し、４月２１日に埋蔵文化財調査協定書を締結した。業務名は「多肥上町テニスクラブ建設工事に伴う埋蔵文化財調査管理業務」とし、高松市教育委員会は発掘調査・整理作業を行い、その費用負担及び契約・支払事務は事業者が行うこととした。

第２節　調査の経過

発掘調査は平成２９年４月２４日から５月１７日の日程で実施した。調査範囲は建物基礎のうち東側を除く範囲と防火水槽部分を対象に実施した。調査面積は５９４㎡である。調査の経過は以下のとおりである。

４月２４日～５月９日	各調査区の１面目の重機掘削。人力による遺構確認・掘削作業。 １面目の遺構の平・断面図作成及び写真撮影
４月２８日～５月１３日	１面目調査終了した調査区から２面目重機掘削。
４月２４日～５月１５日	２面目の遺構の平・断面図作成及び写真撮影。
５月１７日	調査完了。

整理作業は平成２９年７月１日より実施し、遺物の洗浄や実測、写真撮影、図面整理、トレース等を行い、平成３０年６月末には整理作業を終了し、発掘調査報告書を刊行した。

第2章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

多肥宮尻遺跡が位置する高松平野は讃岐平野の一部であり瀬戸内海に北面した香川県のほぼ中央に位置し、概ね高松市の平野部を指す。南部に讃岐山脈の北縁がかかり、東部に屋島や立石山塊、南西中央部に石清尾山や浄願寺山、西部に五色台、六ツ目山、白峰、堂山の山系が連なる。いずれの山地も讃岐山脈の基盤である洪積台地と同じ地層からなるメサ、あるいはビュート型の溶岩台地で２０～３００ｍの低い山地である。また、北方の瀬戸内海には男木島や女木島等の島々も市域に含み、対岸は岡山県岡山市や玉野市、瀬戸内市が対峙する。

高松平野は讃岐山脈より流れ出た諸河川が運んだ土砂によって形成された沖積平野である。高松平野には西から本津川、香東川、御坊川、詰田川、春日川、新川といった河川が北流しているが、中でも香東川が平野の形成に最も大きな影響を及ぼしており、現存する春日川以西は香東川による沖積平野ともいわれている。現在、石清尾山塊の西側を直線的に北流する香東川は１７世紀初めの河川改修によるもので、それ以前は現在の高松市香川町大野付近から東へ分岐した後、石清尾山塊の南側から回り込んで、平野中央部を北東流するもう一本の主流路が存在した。この旧河川は現在では水田地帯及び市街地の地下に埋没しているが、空中写真等より、林地区から木太地区にかけての分ヶ池、下池、長池、大池、ガラ池を結ぶ流路等数本の旧河道が知られており、発掘調査でもその痕跡が確認されている。なお、旧香東川の流路は現在の御坊川として今でもその名残をとどめている。

高松平野を流れる諸河川は、南の讃岐山脈から平野での流路口で穏やかな傾斜を持つ扇状地系の沖積平野を形成し、農耕に適した地味豊かな土壌をもたらしたが、諸河川の中流域は伏流し、表層は涸れ川になることが多く、早くからため池を構築して水不足を解消してきた。そのため、山間の洪積台地洪積層の分かれ目に多くのため池が分布する。また、今回の調査地である多肥地区周辺では、ため池に加え出水（ ですい ）と呼ばれる自噴地下水脈の利用が盛んで両者を併用した特徴的な配水網と厳格な水利慣行を伝えてきた。調査区周辺でも栗木出水や平井出水、鈴木出水等が見られる。

第２節　歴史的環境

高松平野では、高松東道路建設事業、空港跡地開発事業等の大規模な開発事業に伴う発掘調査が行われ、それ以後も開発工事に伴う発掘調査は増加し、多くの遺跡が確認された。多肥上町周辺でも、都市計画道路の新設（多肥平塚遺跡等）や高等学校建設工事（多肥松林遺跡等）等の開発工事が行われ、埋蔵文化財の包蔵状況のデータが蓄積されている。

本節では高松平野における遺構の変遷を多肥上町周辺で確認された遺跡を中心に遺跡の変遷と様相について概観したい。

旧石器時代～縄文時代　高松平野における旧石器時代の遺跡はほとんど確認されていないのが

現状である。久米池南遺跡、雨山南遺跡等が知られるが、表採や混入によるとみられる。中間西坪井遺跡ではＡＴ火山灰層上層からナイフ形石器が出土している。

縄文時代に関しても明確に確認された遺跡は大池遺跡で草創期と考えられる有舌尖頭器２点が表採で報告されているが、この遺跡以降、晩期に至るまでの遺跡は確認されていない。晩期では林・坊城遺跡やさこ・長池遺跡等が確認されている。日暮・松林遺跡や川島本町遺跡等の調査例からみると平野部の微高地や讃岐山脈から延びた丘陵周辺に縄文時代晩期の集落が存在した可能性が高い。

弥生時代　縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて鬼無藤井遺跡、林・坊城遺跡、さこ・長池遺跡、井手東遺跡、空港跡地遺跡、宮西・一角遺跡、松林遺跡、弘福寺領田図比定地等、高松平野の各所で人々の活動痕跡を確認できる。鬼無藤井遺跡を除けば、明確な住居に関わる遺構は少ないが、遺跡の広がりや水田の確認例などから、農耕の定着に加え、稲作の開始による生業の変化が見て取れる。そのため、平野部への集団の進出が促進され、集団の活動の痕跡が縄文晩期以降平野部で確認できるようになったと考えられる。その後、中期前葉に奥の坊遺跡やさこ・長池遺跡を除いては、中期中葉から後葉まで活動した痕跡は見受けられない。弥生時代中期中葉から後葉にかけては多肥松林遺跡や太田下・須川遺跡等で集落を確認できるが、周辺

第１図　周辺発掘調査地位置図

でまとまった資料はこの時期に限られる。その後、中期後半から後期前半は、高松平野の東部で大空遺跡、久米山遺跡群等でまとまった資料が見られる。そして、後期後半から終末期にかけて、平野部の中央部に位置する上天神遺跡や天満・宮西遺跡等で集落が再び営まれる状況が確認でき、外来形土器が、まとまって確認された。

このような集落の移動現象を通時的に把握すると、高松平野では弥生時代を通じて長期に継続する集落は少ないことが指摘できる。これは、自然環境及び社会環境等の変化によって集団の移動や再編成が幾度かに渡って起こった可能性が想定される。

古墳時代　古墳時代前期前半段階までは弥生時代終末期から継続する集落が展開する。集落の変遷は調査事例が少なくあまり明確ではない。古墳時代中期から後期の遺跡としては空港跡地遺跡や太田下・須川遺跡等で居住域が確認できる。また、古墳時代中期からは萩前・一本木遺跡で大規模な集落が築かれ、古墳時代の住居を囲繞する方形区画溝が検出された。

古代　古代における高松平野は山田郡と香川郡で構成されたが、現在の高松市域では古代の阿野郡の一部も含んでいる。萩前・一本木遺跡では飛鳥時代の基幹水路を確認した。白鳳期には屋嶋城が築かれ、坂田廃寺跡等の白鳳寺院が建立される。また、古墳時代後期から古代にかけて自然堤防として機能していた範囲が埋没し、平野全体の起伏が少なくなり、条里地割のような計画的かつ整然として水田区画が導入可能となったと考えられる。平野のやや南側を東西方向に横断する南海道が設置された後、高松平野の東部に位置する詰田川、春日川、新川隆起部の平野部から平野の西部にかけて、南北軸が東に約９～１１度振れた条里地割が広く分布しており、条里地割が面的に施工された可能性が指摘されている。条里地割の一部は弘福寺領讃岐国山田郡田図に描かれた範囲に推定されている。奈良時代に入ると讃岐国分僧寺・尼寺が建立される。古代の遺構や遺物がまとまって確認される遺跡は、前田東・中村遺跡、新田本村遺跡等である。現状では平野部東部の山田郡側で古代の遺跡や遺物が確認されている。その中でも、宝寿寺跡といった寺院や官衙施設との関係が指摘されている前田東・中村遺跡、官衙的遺物が多く出土している新田本村遺跡が所在する付近は山田郡衙が存在した可能性や、これらの遺跡が屋嶋城との関連施設としての機能を有していた可能性が指摘されている。

中世以降　平安時代末（１１世紀後半）高松平野で遺跡数が増加し、鎌倉時代（１３世紀）に空港跡地遺跡、東山崎・水田遺跡、前田東・中村遺跡等で集落跡が確認されている。特に空港跡地遺跡では大規模な調査の結果、中世における地域社会の変遷や土地利用の状況などについて整理され、村落景観の一端が復元されつつある。

中世における高松平野の勢力として香西氏、十河氏、由佐氏等が知られ、これらの居館跡である佐料城、十河城、由佐城が知られている。

近世になると天正１６年（１５８８年）に生駒親正によって高松城の築城が開始される。その後、生駒騒動が起こり、生駒家は出羽国矢島（秋田県由利本荘市）に移され、水戸徳川家の長子であるの松平頼重が東讃を治めることになった。

第３章　調査の成果

第１ 節 試掘調査の成果

事業地は当初周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったが、隣接する「多肥宮尻遺跡」及び「空港跡地遺跡」の遺構が当地に分布する可能性があった。このため、事業者の任意の協力により３本のトレンチを設定し、試掘調査を実施した。

調査成果の概要は、平成２８年度に刊行した高松市教育委員会編『高松市内遺跡発掘調査概報―平成２８年度国庫補助事業―』に掲載したが、要点は以下の４点にまとめられる。

①すべてのトレンチで、遺構・遺物が認められた。土坑・ピットなどの遺構は、事業地北西側に比較的密に分布する。また、事業地南側の２・３トレンチでは、自然流路と考えられる黒褐色系シルトの堆積が認められる。②遺構の検出された褐灰色シルト層は、中世の遺物を含む。また、黒褐色系シルトは褐灰色シルト層の直下に位置し、３トレンチでは層中より多量の弥生土器が出土した。③西側隣接地及び北側隣接地の調査では、一連の自然流路が検出されている。埋土の特徴や流走方向、出土遺物の時期が共通しており、今回検出した自然流路様の堆積と対応する可能性が考えられる。④遺構の連続性及び出土遺物の時期の共通性等から、多肥宮尻遺跡と関連する遺構群と推定できる。

以上の結果より、事業地の全域が、周知の埋蔵文化財包蔵地「多肥宮尻遺跡」の範囲に追加登録された。

第２節　調査の概要と基本土層

今回の発掘調査では５ヶ所の調査区を設定し、遺構の掘削や測量、写真撮影等を行った（第２・３図)。遺物の取り上げ方法は遺構単位で取り上げ、層位ごとに取り上げた遺物は層位ごとに抽出した。遺構番号は調査区に関わらず遺構ごとに番号を記している。

今回の調査では住居跡１棟、流路跡２条、溝跡２条、土坑２１基、ピット４０基、包含層２ヶ所を確認した。遺構面は２～３面で、１面目は弥生時代前期後半から弥生時代後期後半までの遺構が確認された（第２図)。１面目で確認した遺構は住居跡１棟、流路跡２条、溝跡１条、土坑１８基、ピット３３基、包含層２ヶ所である。２面目で確認した遺構は溝跡１条、土坑３基、ピット５基である。２面目の時期は不明だが、弥生時代前期後半より古い時期の遺構と考えられる（第３図)。また、第３調査区は３面目を確認しており、時期は不明だがピット２基を確認した。

１面目の遺構検出状況は北側に土坑やピットが集中し、西側や南側では流路跡が幅広く確認できた。また、第２調査区を中心とした東側では弥生時代前期後半から弥生時代中期初頭を中心とした土坑を複数確認している。調査区南東側では弥生時代の包含層を確認した。

基本土層は調査区によって堆積層や遺構面の高低差、遺構面を形成する土層が異なる（第４図－ Ａ・Ｂ、第１０図－ Ｃ、第１８図、第２１図)。全体的な層位は、第２調査区東側を中

心にみると現地表面は花崗土により盛土され、その下面は耕作土や床土が見られる（第１０図－Ｃ － Ｃ’）。その下層に１面目の褐色シルト層が確認でき、その下層から褐色、暗褐色土層が３層分確認できる。８層に褐色シルト層が確認でき２面目となる。また、８層を含め、９、１０層は基盤層になると考えられる。他の調査区の土層は第４図－ Ａ － Ａ’・Ｂ － Ｂ’で示すように土質や堆積層位は異なっていることがわかる。これは、遺構確認面を基準に高低差を考えるとかなり凹凸が見られることから、当時の地表面は凹凸の見られる地形だったことが推測され、そこに堆積する土層も調査区によって異なることが考えられる。そのため、遺構面を形成する土層は以下のようになる。１面目は第１調査区でにぶい黄褐色シルト、第２調査区で褐色細砂、第５調査区で黒色シルト質細砂層により形成できる。２面目は暗褐色礫混じり細砂や褐色シルト、褐灰色シルト質細砂となる。２面目は大よそ褐灰色～褐色シルト層となる。

第３節　第１調査区の遺構・遺物

第１調査区は対象地の北側に設置した調査区で東西４１ｍ×南北３ｍで設置した（第４図）。１面目で検出した遺構は住居跡１棟、土坑１３基、ピット１２基を確認した。弥生時代前期後半頃を中心とした遺構群と考えられる。遺構は調査区中央から東側にかけて確認したが西側では検出できなかった。２面目で確認した遺構は溝跡１条、土坑２基、ピット４基を確認した。遺構は調査区中央から西側にかけて検出した。時期は出土遺物がないため不明だが、弥生時代前期後半よりも古いと推定できる。

１）１面目

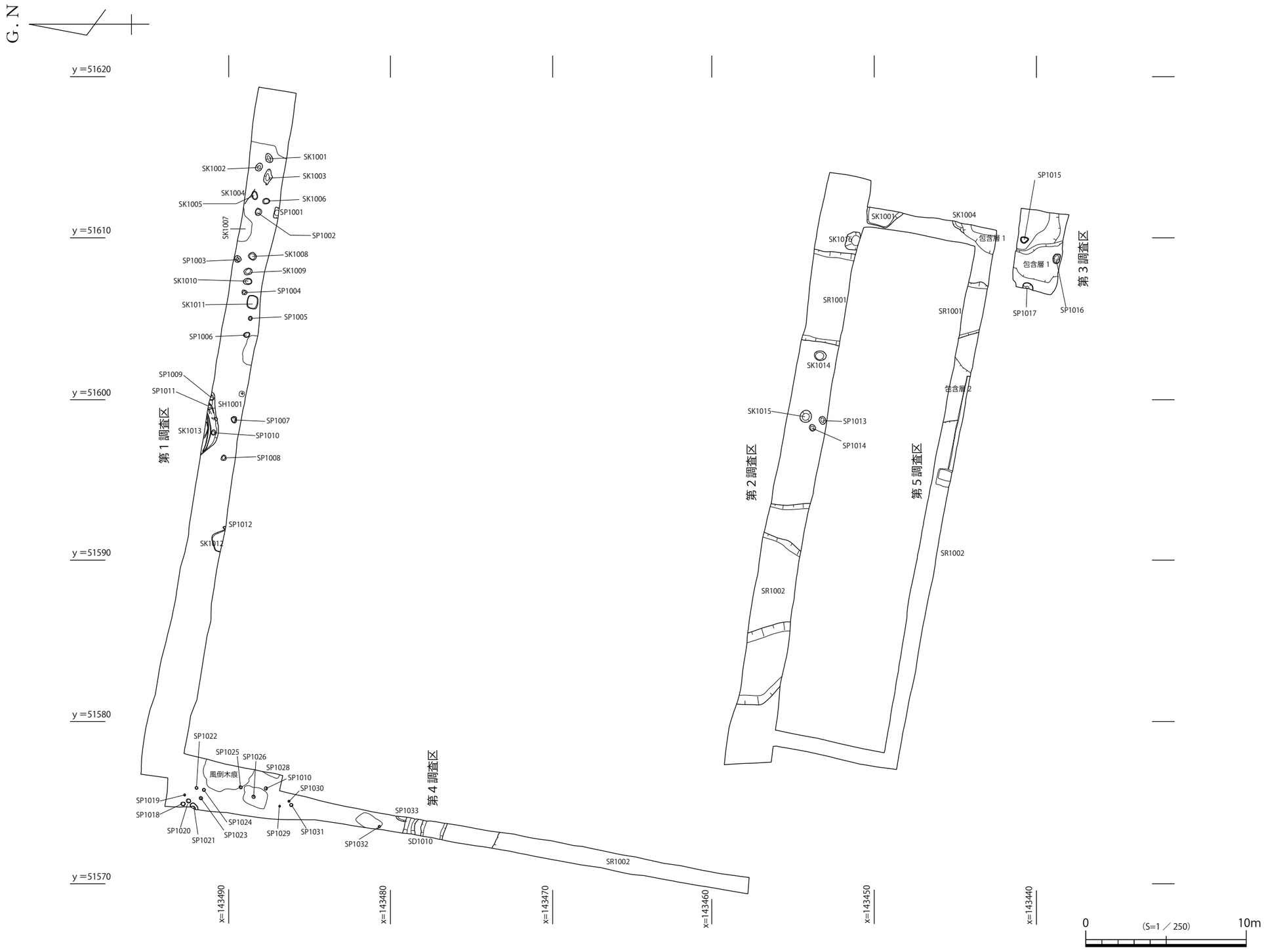
ＳＨ１００１（第５図）

調査区中央で確認し、北側は調査区外である。ＳＰ１０１０・１０１１に切られている。確認した規模は東西約４．０ｍ×南北約０．９ｍ、深さ約１５～２０㎝である。平面形状は隅丸方形か不整形な楕円形と推測できる。柱穴と考えられるＳＰ１００９は深さ約２５㎝で周溝と考えられる溝の外側で検出した。このことから、建物の柱穴は建物外にあったと推測できるが、規則的な配置ではなかったと考えられる。またＳＫ１０１３は配置や断面の状況から住居に伴う貯蔵に関連した遺構と推測される。埋土は２層が灰黄褐色細砂質シルト層である。貯蔵穴や周溝、柱穴と考えられる３、４、７層はいずれもにぶい黄褐色細砂層で地山ブロックを含む。５層は貼床と考えられ、褐色細砂質シルト層でほぼ地山ブロックで形成できる。

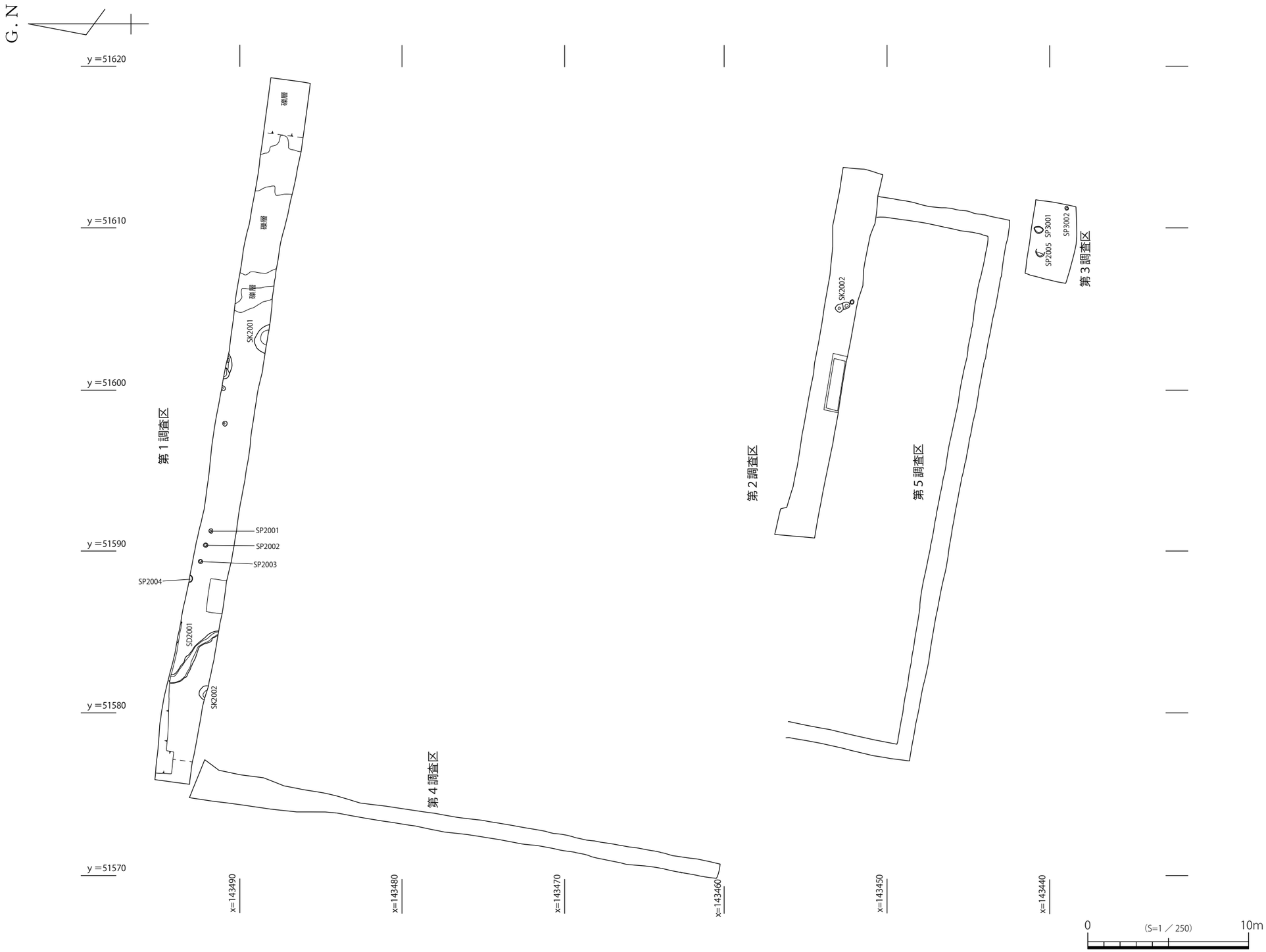
遺物は第５図‐１弥生土器の甕の口縁部が出土した。住居跡の詳しい時期は不明だが弥生時代に相当すると考えられる。

ＳＫ１００１（第６図）

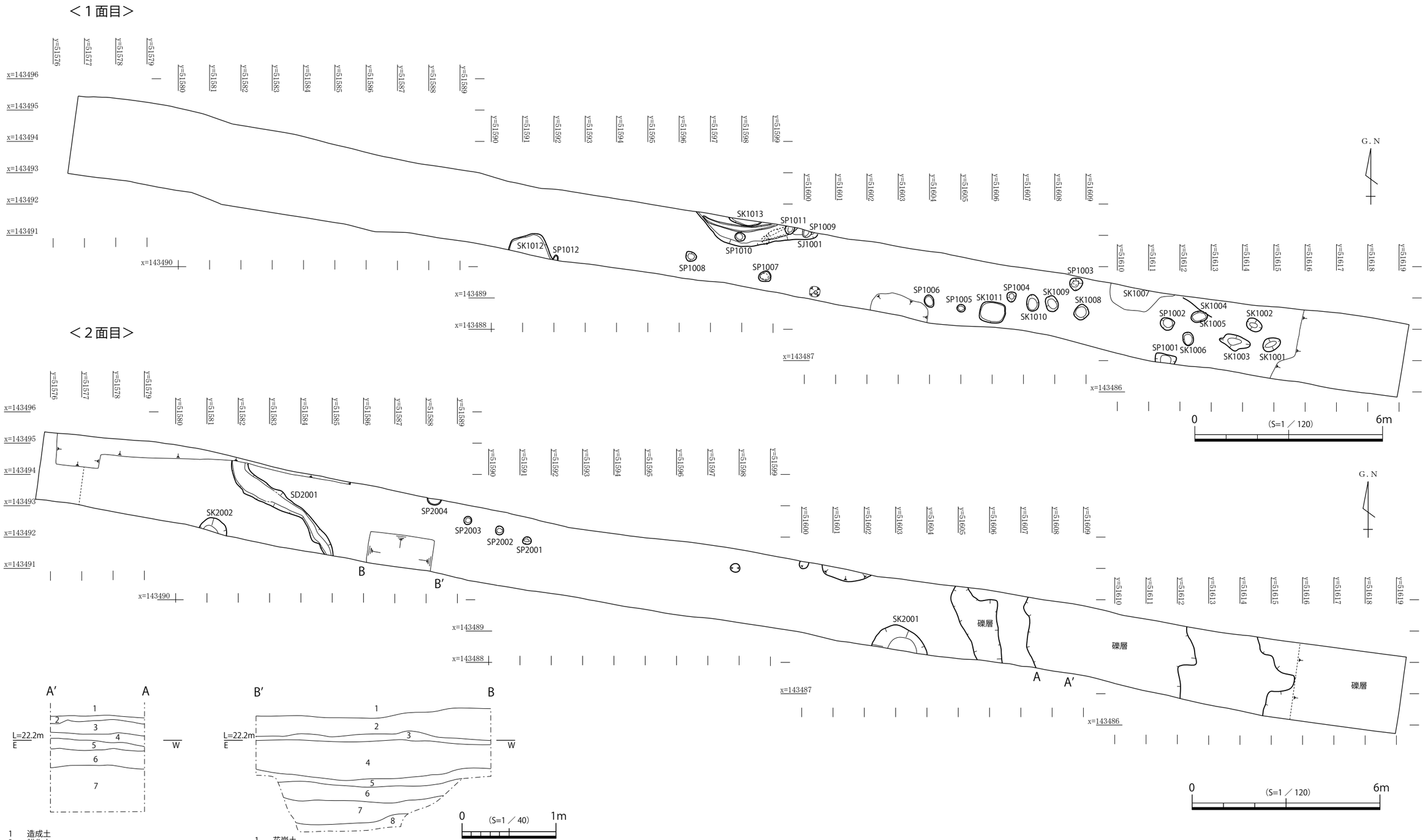
調査区東側で確認し、東西約０．６ｍ×南北約０．４ｍ、深さ約３０㎝である。断面形状はＵ字状で、褐色やにぶい黄褐色細砂質粗砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。



第２図　遺構配置図（１面目）



第３図　遺構配置図（２面目）



1　造成土
2　耕作土
3　床土
4　10YR5/4 にぶい黄褐色細砂　3 ㎜程度の礫をわずかに含む
5　10YR4/3 にぶい黄褐色細砂　5 ～ 10 ㎜の礫をまばらに含む（第 1 遺構面）
6　10YR3/4 暗褐色礫混じり細砂　2 ～ 5 ㎝の礫を多量に含む　7 層に比べしまり強い（第 2 遺構面）
7　10YR4/4 褐色中粒砂　1 ～ 3 ㎝の礫を多量に含む

1　花崗土
2　耕作土
3　床土
4　10YR5/8 黄褐色シルト質細砂
5　7.5YR5/6 明褐色細砂　地山ブロック 5% 含む
6　10YR5/4 にぶい黄褐色細砂　地山ブロック 3% 含む
7　10YR4/6 褐色細砂
8　10YR5/6 黄褐色シルト質細砂　10 ㎜程度以下の礫を多く含む

第 4 図　第 1 調査区　1・2 面目平面図（S ＝ 1／ 120・1／ 40）

ＳＫ１００２（第６図）

調査区東側で確認し、東西約０．５ｍ×南北約０．４ｍ、深さ約１５㎝である。断面形状はＵ字状で、褐色細砂質粗砂が堆積している。遺物は出土しなかった。

ＳＫ１００３（第６図）

調査区東側で確認し、東西約１．０ｍ×南北約０．５ｍ、深さ約２０㎝である。断面形状は不整形なレンズ状で、褐色粗砂質細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

ＳＫ１００４（第６図）

調査区東側で確認した。深掘りしたため形状は不明だが、ＳＫ１００５を切り込んでいる。暗褐色細砂層が堆積している。図化していないが土師器片が出土している。

ＳＫ１００５（第６図）

調査区東側で確認し、東西約０．５ｍ×南北約０．５ｍである。ＳＫ１００４に切られている。暗褐色細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

ＳＫ１００６（第６図）

調査区東側で確認し、東西約０．３ｍ×南北約０．５ｍ、深さ約２０㎝である。断面形状はＵ字状で褐色細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

ＳＫ１００７

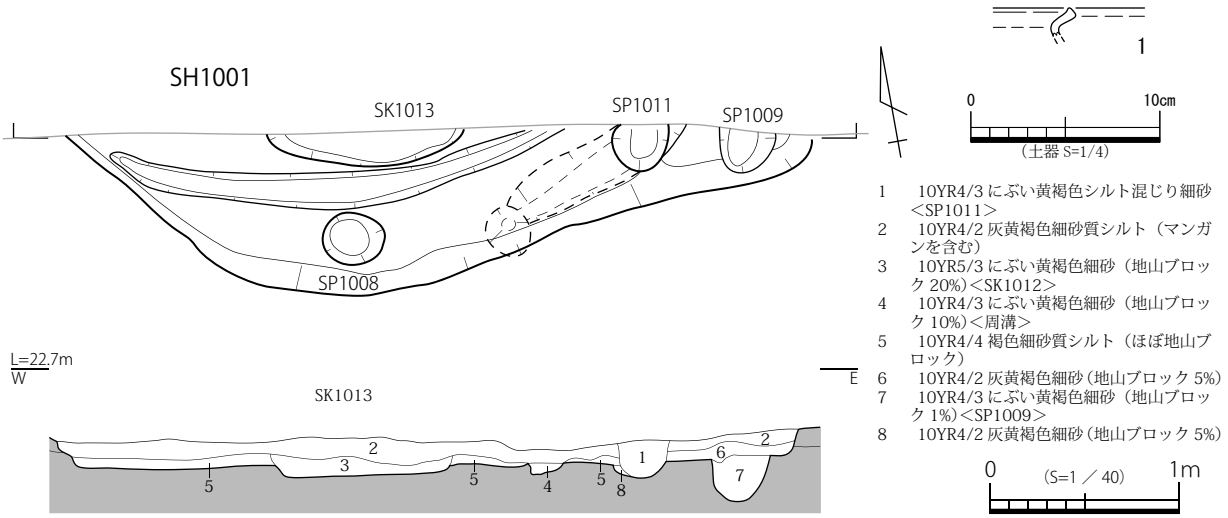
調査区東側で確認した。図化していないため詳細は不明である。

ＳＫ１００８（第６図）

調査区東側で確認し、東西約０．５ｍ×南北約０．５ｍ、深さ約２０㎝である。断面形状は不整形なＵ字状で、暗褐色細砂～シルト質細砂層が堆積している。図化していないが弥生土器片が出土した。

ＳＫ１００９（第６図）

調査区東側で確認し、東西約０．４ｍ×南北約０．５ｍ、深さ約２０㎝である。断面形状はＵ



第５図　第１調査区　ＳＨ平断面図・出土遺物

字状で、暗褐色細砂層が堆積している。図化していないが弥生土器片が出土している。

ＳＫ１０１０（第６図）

調査区東側で確認し、東西約０．４ｍ×南北約０．５ｍ、深さ約４０㎝である。断面形状はU字状で、暗褐色細砂層が堆積している。図化していないが弥生土器片が出土している。

ＳＫ１０１１（第６図）

調査区東側で確認し、東西約０．８ｍ×南北約０．７ｍ、深さ約２０㎝である。断面形状はU字状で、暗褐色細砂層が堆積している。図化していないが弥生土器片が出土した。

ＳＫ１０１２（第６図）

調査区中央で確認し、遺構の北半分を検出した。確認した規模は東西１．５ｍ×南北約０．７ｍ、深さ約３０㎝である。平面形状は隅丸方形と推測できる。断面形状は垂直に立ち上がり、箱型である。埋土に炭化物層や焼成による硬化面等を確認した。１層は灰黄褐色細砂層で黒色粒状のマンガンや土器を多量に含む。２層は褐色シルト質細砂層で土器を含む。３層はにぶい黄褐色細砂層をベースとした炭化物が多量に確認した層である。５層は暗褐色細砂層で焼成による硬化面で、地山ブロックや焼土ブロックを含む。また、焼土塊が出土した。出土した遺物から前期Ⅱ a 頃埋没したと考えられる。この遺構の性格としては土器焼成遺構の可能性が考えられるが、詳細は第４章第２節で触れたい。

出土した遺物は第６図‐２～９である。２～８は弥生土器で９は石器である。２は甕の体部から口縁部で、外面に３条の沈線が見られる。また、黒斑が見られる。３は壺の口縁部で時期は前期Ⅱ a と考えられる。４～７は甕の口縁部から体部の一部である。４は瀬戸内型甕考えられる。口縁部に刺突文を入れ、時期は前期Ⅰ c 期と推定できる。５、６は沈線が２～３条見られる。５は前期Ⅱ a と考えられる。８は体部で突帯があり、摩滅しているが刺突文が見られる。９はサヌカイトの石鏃で未製品である。

ＳＰ１００１（第７図）

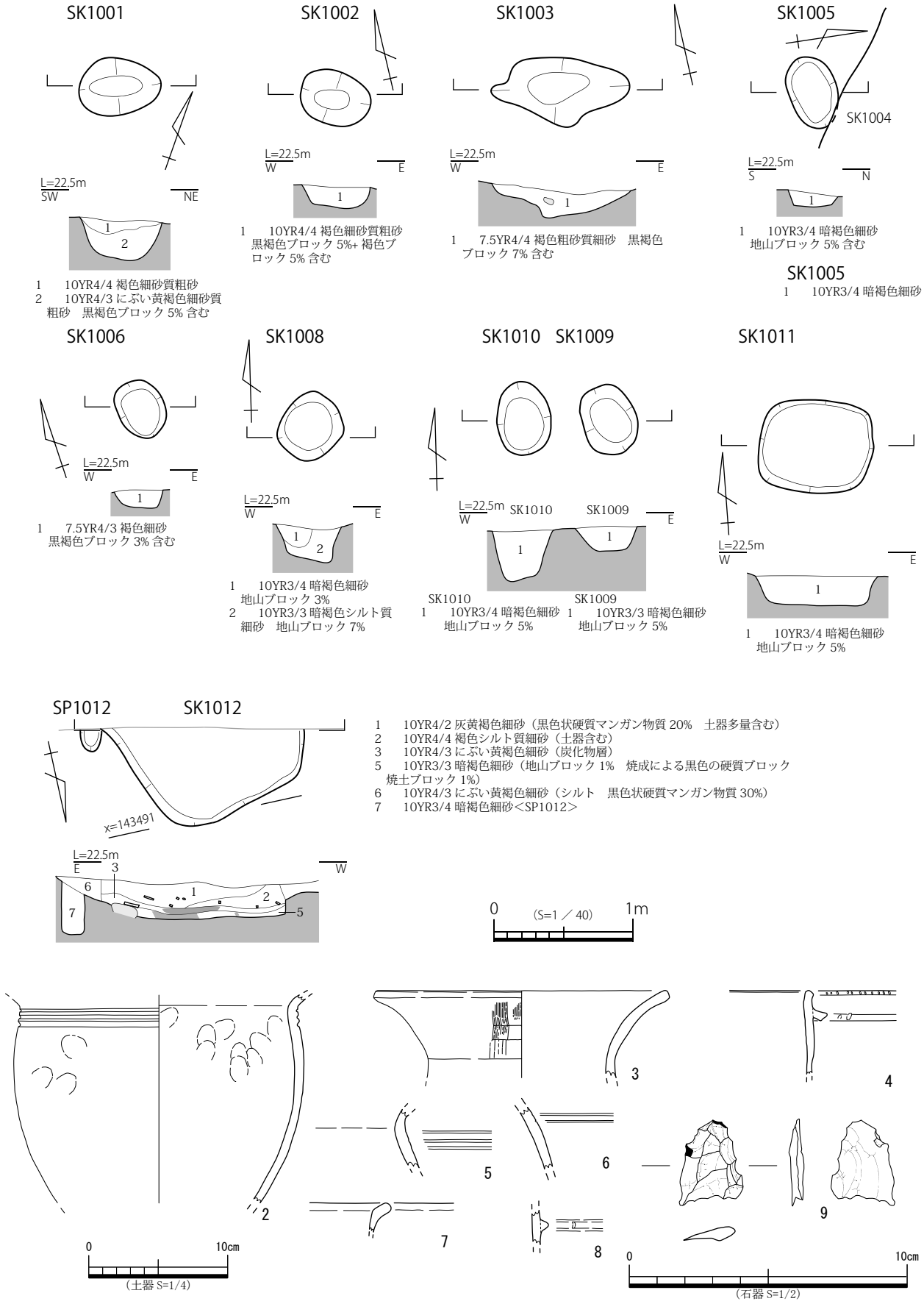
調査区東側で遺構の北側半分を確認した。確認した規模は東西約０．７ｍ×南北約０．４ｍ確認し、推定できる南北の大きさは０．８ｍと推測され、平面形状は正方形になると推測できる。深さは約２５㎝である。土層断面で柱痕を確認しており、形状が異なるが、ＳＰ１００２と一連のものと推測できる。これらに伴うピットが東西にないことから南北方向の柵列と推測できる。遺物は出土しなかった。

ＳＰ１００２（第７図）

調査区東側で確認し、直径約０．４ｍ、深さ約３０㎝の円形である。断面形状はU字状である。柱痕は確認できなかったが、遺構の深さがＳＰ１００１と類似することから一連の遺構と推測できる。遺物は出土しなかった。

ＳＰ１００３（第７図）

調査区東側で確認し、直径約０．４ｍの円形で、深さ約２５㎝である。断面形状はU字状で、



第 6 図　第 1 調査区　ＳＫ平断面図・出土遺物

暗褐色細砂層等が堆積している。柱痕を確認している。また、ＳＰ１００４・１００５とは６０㎝～７０㎝の間隔で並んでいることから南西から北東に向かって続く柵列と推測できる。図化していないが弥生土器が出土している。

ＳＰ１００４（第７図）

調査区東側で確認し、直径約０．３ｍの円形で、深さ約２８㎝である。図化していないが弥生土器とサヌカイト片が出土した。

ＳＰ１００５（第７図）

調査区東側で確認し、直径約０．３ｍの円形で、深さ約２０㎝である。断面形状はU字状で、暗褐色細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

ＳＰ１００６（第７図）

調査区東側で確認し、直径約０．４ｍの楕円形で、深さ約２０㎝である。断面形状はU字状で、暗褐色細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

ＳＰ１００７（第７図）

調査区東側で確認し、直径約０．４ｍの楕円形で、深さ約１５㎝である。遺物は出土しなかった。

ＳＰ１００８（第７図）

調査区東側で確認し、直径約０．４ｍの円形で、深さ約２㎝である。暗褐色細砂層が堆積している。このピットとＳＰ１０１０・１０１１とは６０㎝の間隔で並んでいることから南西から北東に向かって続く柵列と推測できる。

ＳＰ１００９（第５図）

ＳＨ１００１内で確認し、南側半分を検出した。直径約０．４ｍの円形と推測でき、深さは約２５㎝である。ＳＨ１００１の柱穴と考えられ、第７層にあたる。遺物は出土しなかった。

ＳＰ１０１０（第７図）

調査区東側で確認し、直径約０．４ｍの円形で、深さは約３２㎝である。ＳＨ１００１を切っている。黒褐色細砂層が堆積している。図化していないが弥生土器が出土している。

ＳＰ１０１１（第５図）

調査区東側で確認し、遺構の南側半分を検出し、直径約０．４ｍの円形で、あると推測できる。深さ約２０㎝である。ＳＨ１００１を切っている。図化していないが弥生土器が出土した。

ＳＰ１０１２（第６図）

調査区中央で確認し、遺構の北側半分を検出し、直径約０．４ｍの楕円形と推測できる。深さ３８㎝である。この遺構はＳＫ１０１２に切られている。遺物は出土しなかった。

２）２面目

ＳＤ２００１（第８図）

調査区西側で確認した。溝の軸は南東から北西方向に延びるものである。検出した長さは約４．

０ｍ、幅約１．０ｍ、深さ約１０㎝である。断面形状はレンズ状で、にぶい黄褐色シルト質細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

ＳＫ２００１（第９図）

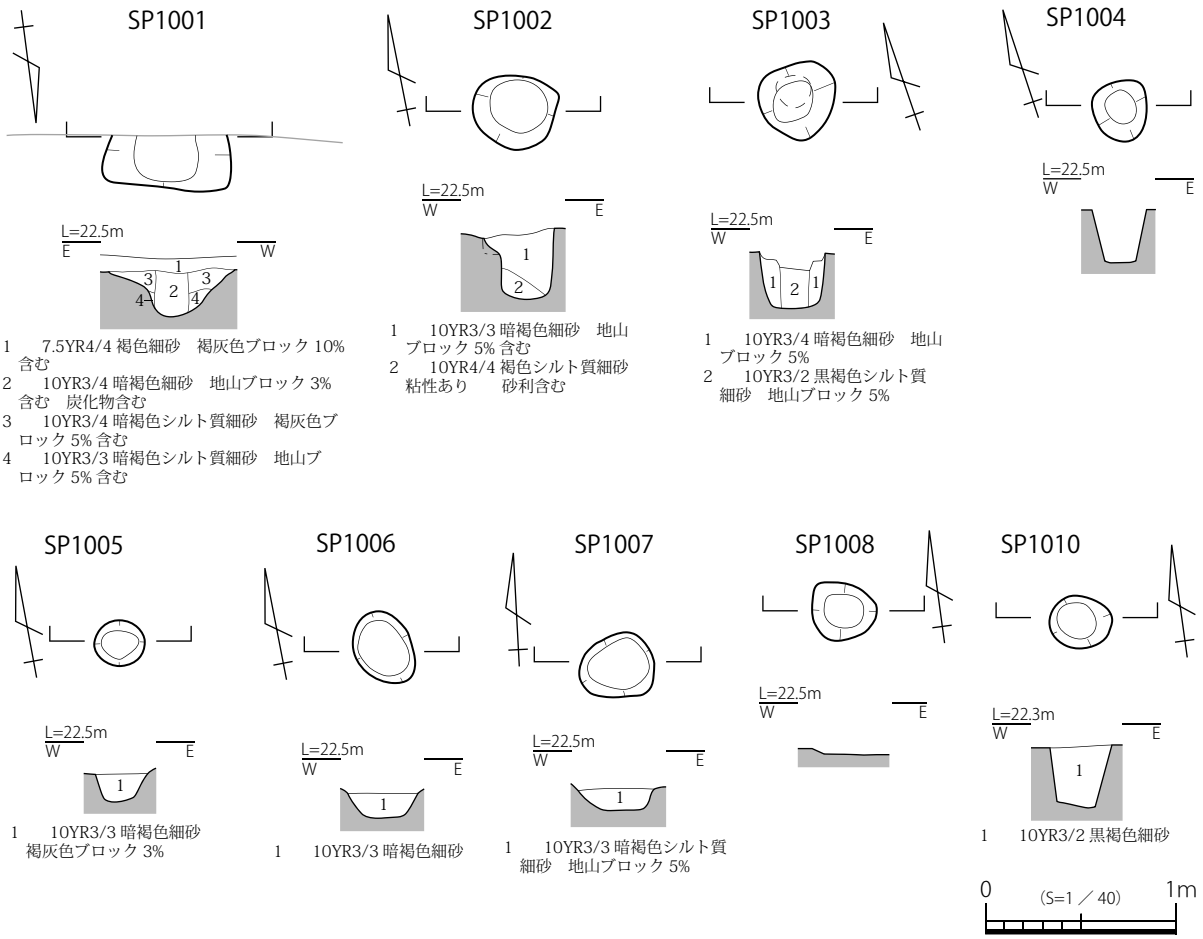
調査区東側で確認し、遺構の北側半分を検出した。直径は約１．３ｍと推定できる。深さは約１．０ｍである。断面形状は緩いＵ字状である。堆積層は１～９層に分かれ、にぶい黄褐色細砂や灰黄褐色シルト質細砂層等である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ２００２（第８図）

調査区西側で確認し、遺構の北半分を検出し、直径約１．０ｍと推定できる。深さは約６０㎝である。断面形状はＵ字状で、８層にわたり細かく堆積している。

ＳＰ２００１（第９図）

調査区西側で確認し、直径約０．３ｍ、深さ約２５㎝である。断面形状はＵ字状で、暗褐色細砂層が堆積している。ＳＰ２００１～２００４と間隔がほぼ等しいことから柵列になる可能



第７図　第１調査区　ＳＰ平断面図

性がある。遺物は出土しなかった。

ＳＰ２００２（第９図）

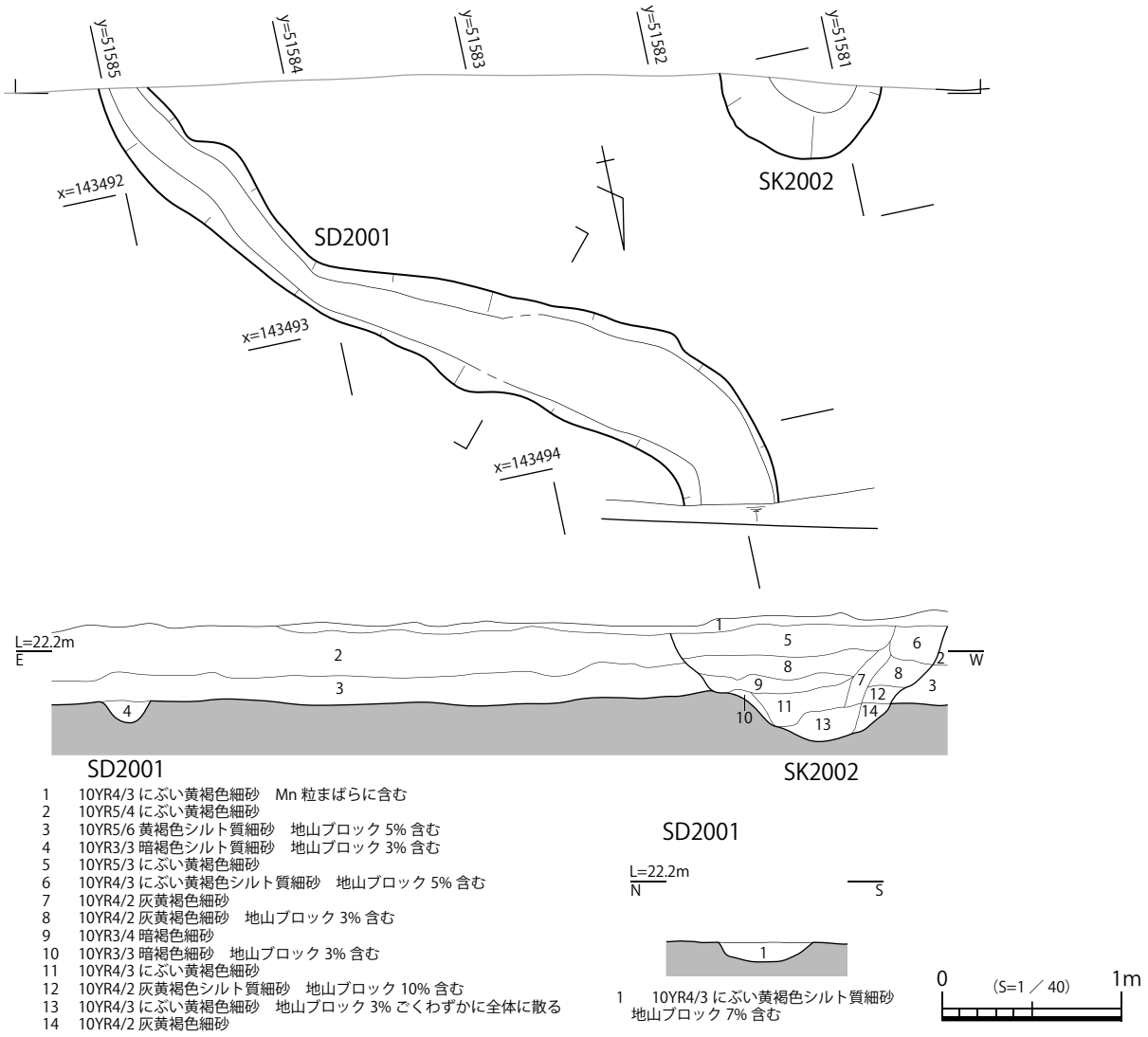
調査区西側で確認し、直径約０．３ｍ、深さ約３０㎝である。断面形状はＵ字状で、暗褐色細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

ＳＰ２００３（第９図）

調査区西側で確認し、直径約０．３ｍ、深さ約１０㎝である。断面形状はレンズ状で、黒褐色細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

ＳＰ２００４（第９図）

調査区西側で確認し、遺構の南半分を検出し、直径約４０㎝になると推定できる。深さは約４０㎝である。断面形状はＵ字状で、灰黄褐色シルト質細砂層等が堆積している。遺物は出土



第８図　第１調査区　ＳＤ・ＳＫ平断面図

しなかった。

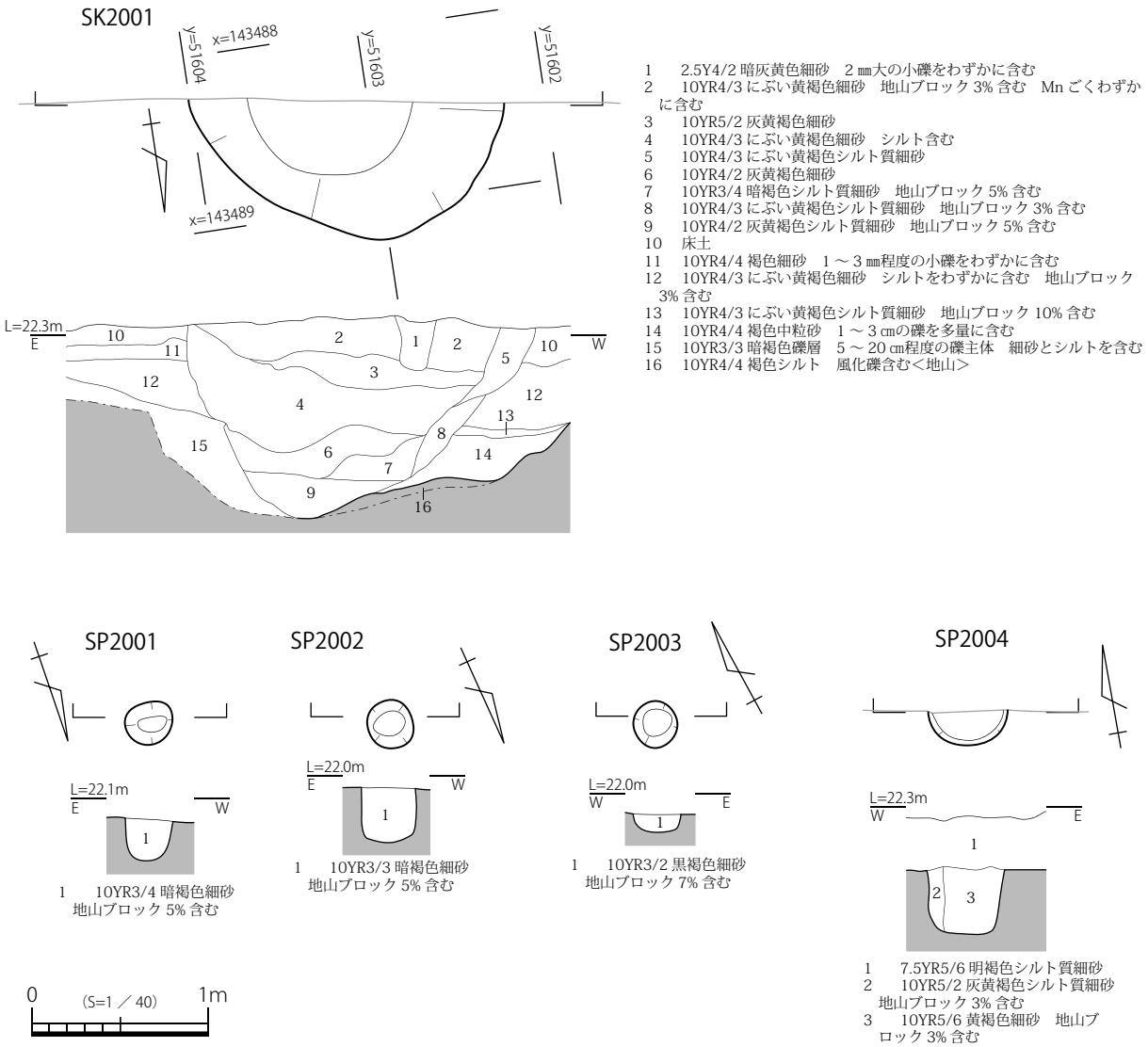
第４節　第２調査区の遺構・遺物

第２調査区は対象地の南側に設置し、第５調査区と接する。調査区は東西約３７ｍ×南北約２．５ｍである（第１０図）。１面目で確認した遺構は流路跡２条、土坑３基、ピット２基である。遺構は調査区中央から西側ではＳＲ１００２が広がり、その他の遺構は調査区中央から東側で検出した。２面目で確認した遺構は土坑１基で、調査区東側で確認した。

１）１面目

ＳＲ１００１（第１１図）

調査区東側で確認し、南北に延びる流路跡である。確認した幅は約６ｍである。深さは３０㎝で浅めである。埋土は４層確認され、中粒砂等比較的大きな粒子であることや礫を多く含む



第９図　第１調査区　ＳＫ・ＳＰ平断面図

ことから水の流れを伴っていたと考えられる。２層からは比較的多量の土器が出土し、また、最下層の４層からも遺物が出土している。この流路跡は南側の第５調査区でも確認されているが、北側の第１調査区では確認されていないことから、この区間で北東方向に軸が変わると考えられる。当該地東側で空港跡地遺跡の調査を実施した際、流路跡を検出したことから同一の可能性がある。南側で確認された部分の幅は大差ないが、埋土が浅くなっていることが明らかになっている。埋没した時期は中世の土師質土器が含まれるが、弥生時代の遺物が多く出土しており、時期を特定できるものから弥生時代前期後半から前期末にかけて埋没したと考えられる。

出土した遺物は第１１図－ １０～１８である。主に弥生土器が出土し、１８は土師質土器である。

１０～１８は第４層から出土したものである。１０～１３は甕の底部である。１４は甕の体部で外面はタテハケによる調整である。１５は甕の口縁部で口縁部上面に１条の沈線を有する。１６は甕と考えられる口縁部で内面に粘土を貼りつけている。１７は壺の口縁部で、時期は前期Ⅱ ｃ期と推定できる。

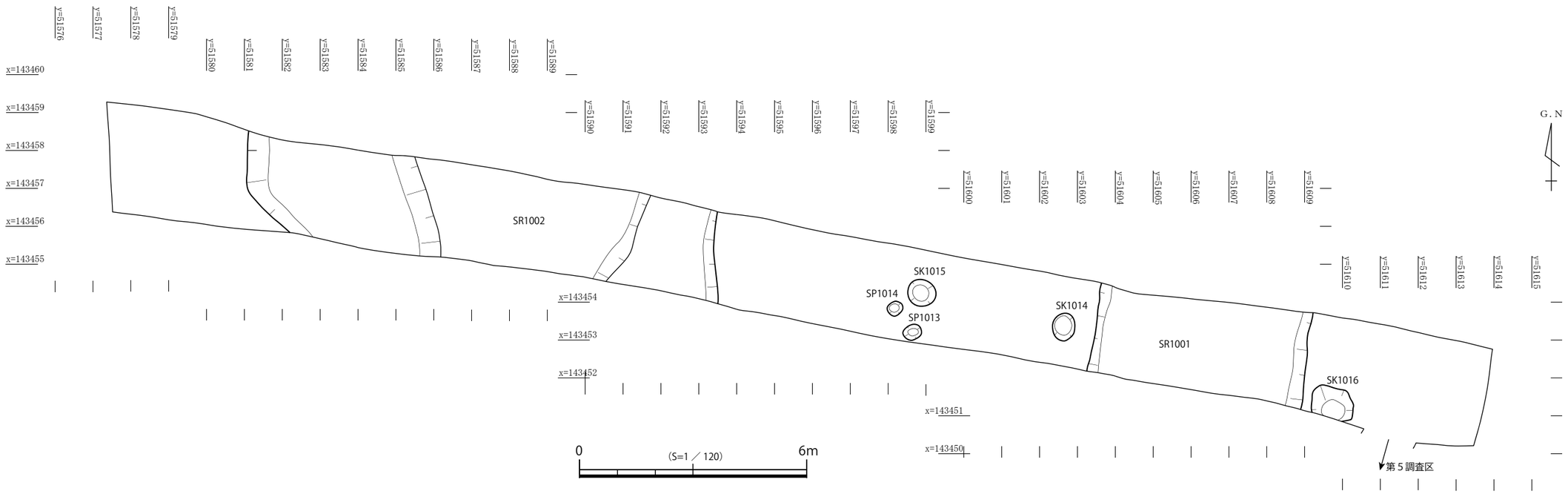
１８は土師質土器で足釜の脚部である。

ＳＲ１００２（第１２図）

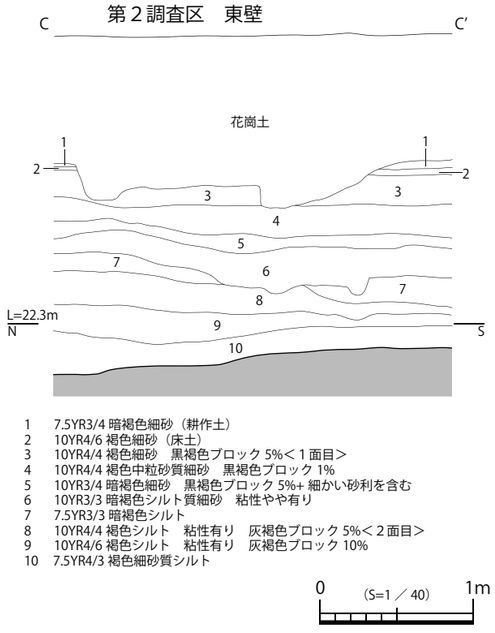
調査区中央から西側にかけて確認した北西流する流路跡である。確認した幅は約１３．６ｍで、深さ約１．２ｍである。流路跡の西側は調査区外となるため確認できなかった。断面形状は流路の中心がゆるいU字状で外側に広がる。埋土は１２層に分かれ、２時期にわたる埋没過程を確認した。土層は３層の褐灰色シルト～極細砂が最終埋没と考えられ、４層黒褐色シルト～粘土層が堆積し、弥生時代前期後半、後期後半頃、５～７世紀頃の土器片が大量に出土した。前述した２時期にわたる埋没過程の２時期目と考えられる。その下層である５層のにぶい黄褐色粘土層では円礫を少量含む。６層は黒色粘土層で円礫を含み土器を含む。６層が１時期目の堆積層と考えられる。この層や下層の９～１１層からは弥生時代前期後半から前期末頃、弥生時代後期後半から末頃の弥生土器が出土した。流路の最下層である１１層はにぶい黄褐色粗砂～礫層で川底と考えられる。堆積順序は前述した通り、最初に５～１１層が堆積している後、３、４層が堆積していると考えられる。堆積している時期は１時期目の堆積層から弥生時代後期後半から後期末頃の土器が出土することから、この時期以降に堆積していると考えられる。一方、２時期目に堆積している層からは７世紀初頭頃の須恵器が出土することから古代に流路が最終埋没したと考えられる。

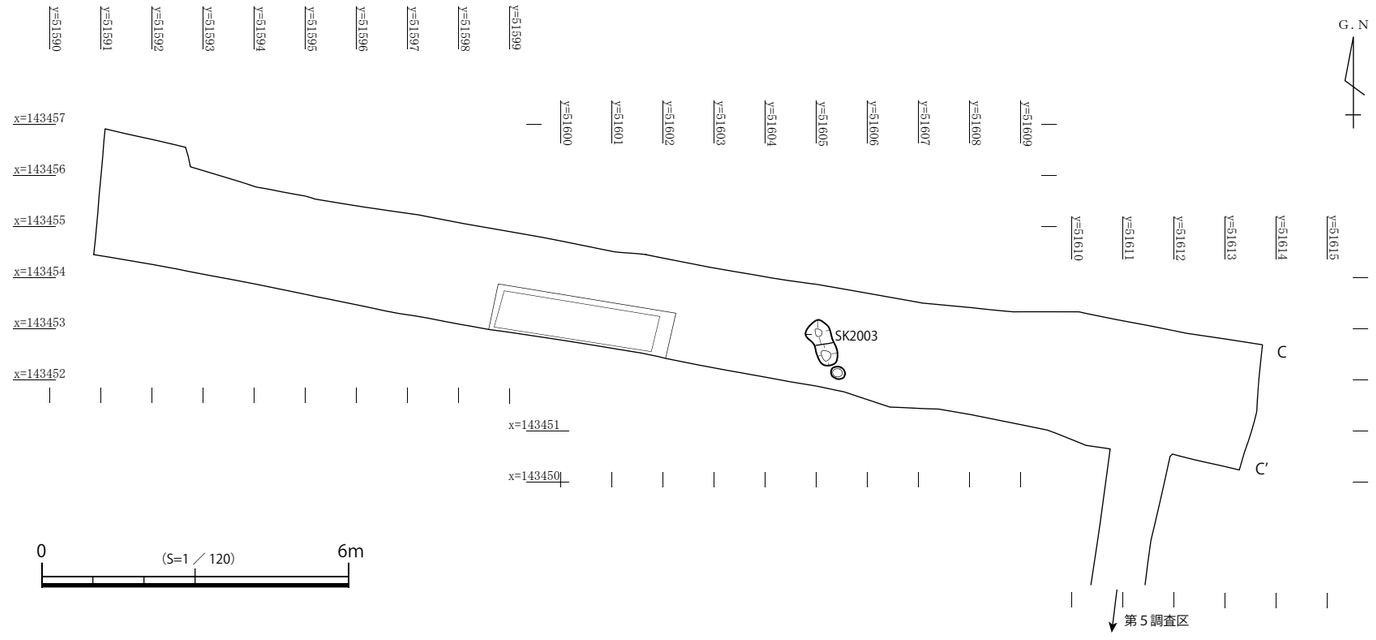
出土遺物は第１３図－ １９～第１５図－ １０２で、弥生土器、須恵器、石器である。弥生土器は甕、壺、高杯、器台、製塩土器が出土し、弥生時代前期後半から中期初頭にかけてと弥生時代後期前葉から後期後葉のものである。須恵器は杯身、蓋、甕が出土し、６世紀初頭から７世紀初頭にかけてのものである。石器は石鏃、スクレイパー、石錐等が出土した。

＜１面目＞

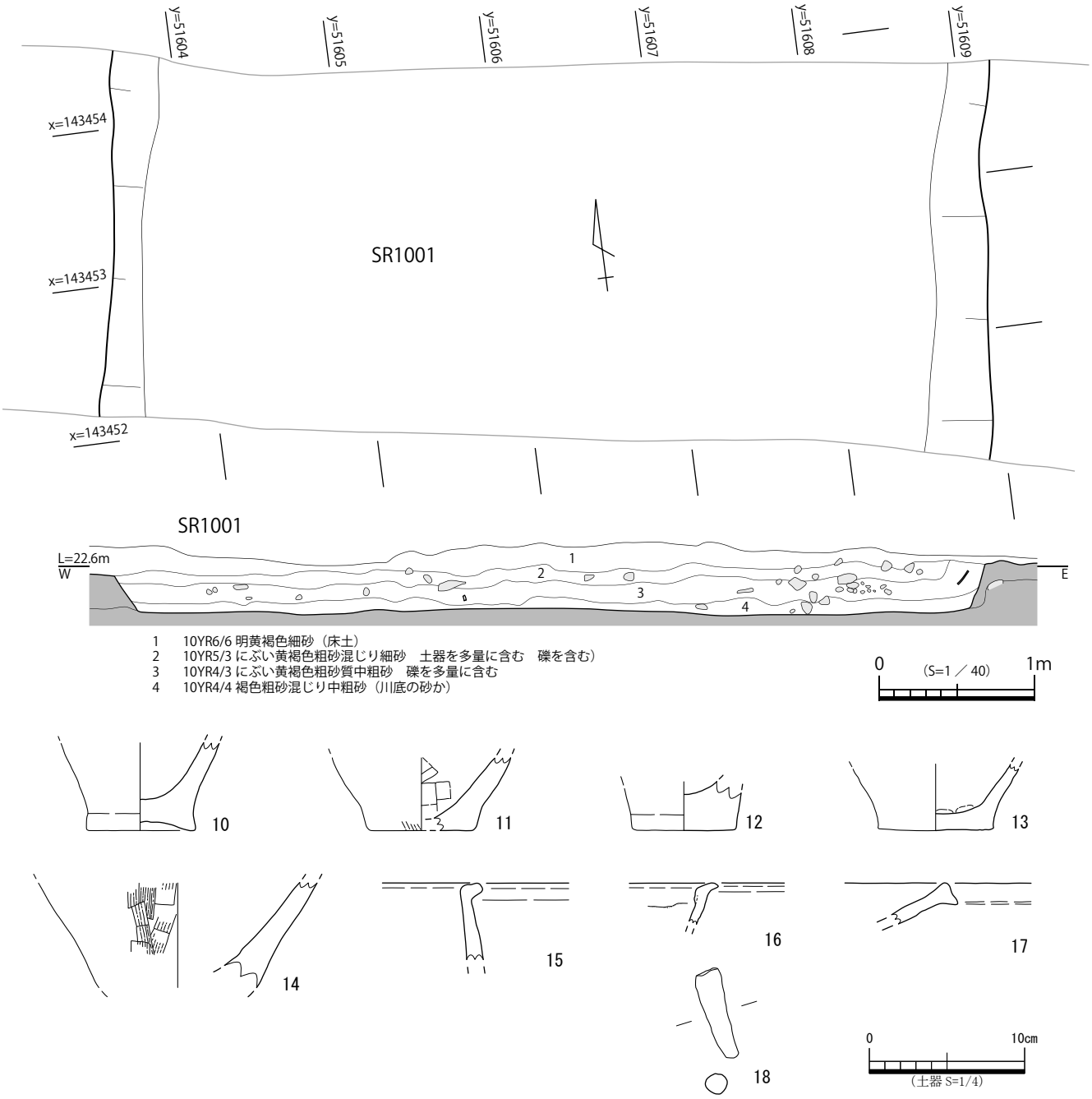


＜２面目＞





第 10 図　第２調査区　１・２面目平面図・土層図（Ｓ＝１／ 120・１／ 40）



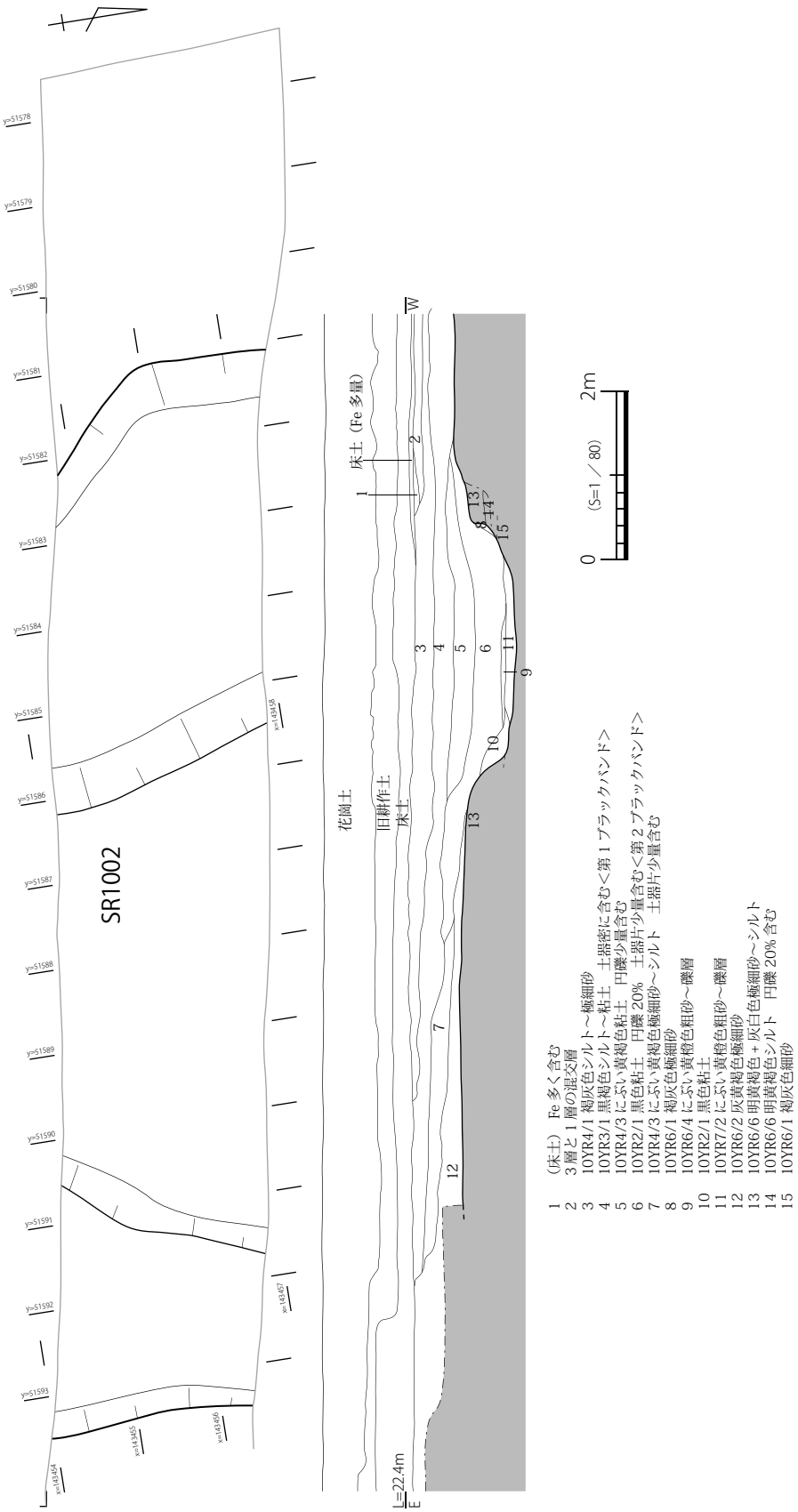
第 11 図　第２調査区　ＳＲ 1001 平断面図・出土遺物

１９～２７は第６層から出土した弥生土器である。１９～２２は甕の底部である。２０は底部内面に粘土を上乗せして貼りつけた痕跡が見られる。２２は内面に種子等が貼りついた痕跡が見られるが、特定できていない。２３は甕の体部でタテハケの調整をしている。２４は蓋で４つの孔が穿たれ、その内２つが欠損している。残存している孔の径は４㎜である。２５は壺の体部でヘラケズリ調整をしている。２６、２７は胎土に角閃石を含むことから香東川下流域産土器と考えられる。

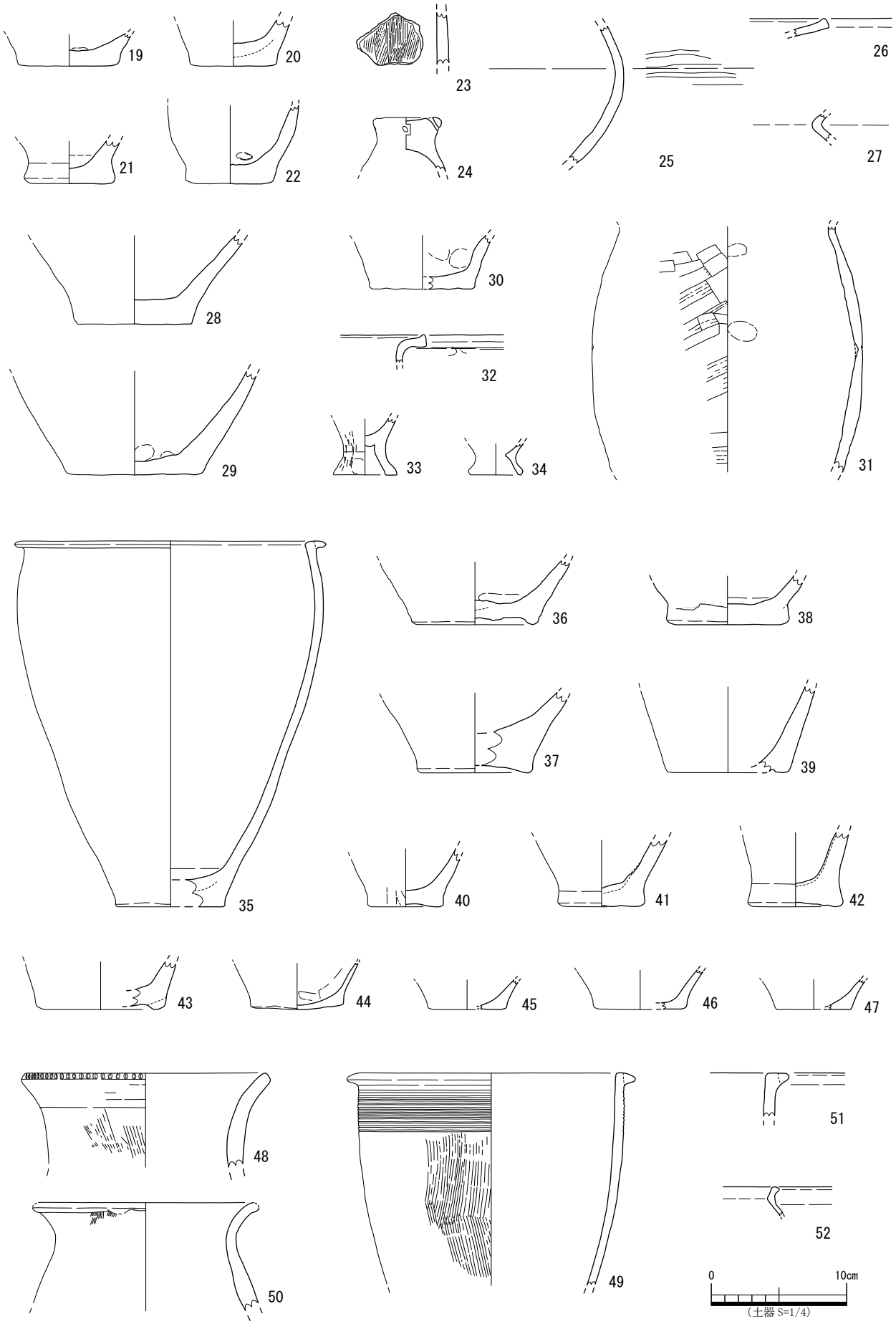
２８～３４は第４層から出土した弥生土器である。２８～３０は甕の底部である。２８は破損面が明瞭で擬似口縁のような破損をしていることから粘土紐積み上げ技法とわかる。３１は

外面に横ハケで、内面はナデ及び指押さえである。３２は壺の口縁部で、胎土に角閃石や金雲母が含まれる。時期は南谷Ⅰ～Ⅱ頃と考えられる。３３、３４は製塩土器の脚部である。３３は外面をケズリ調整しており、時期は南谷Ⅰ～Ⅱ頃と考えられる。３４は胎土に角閃石を含んでいる。

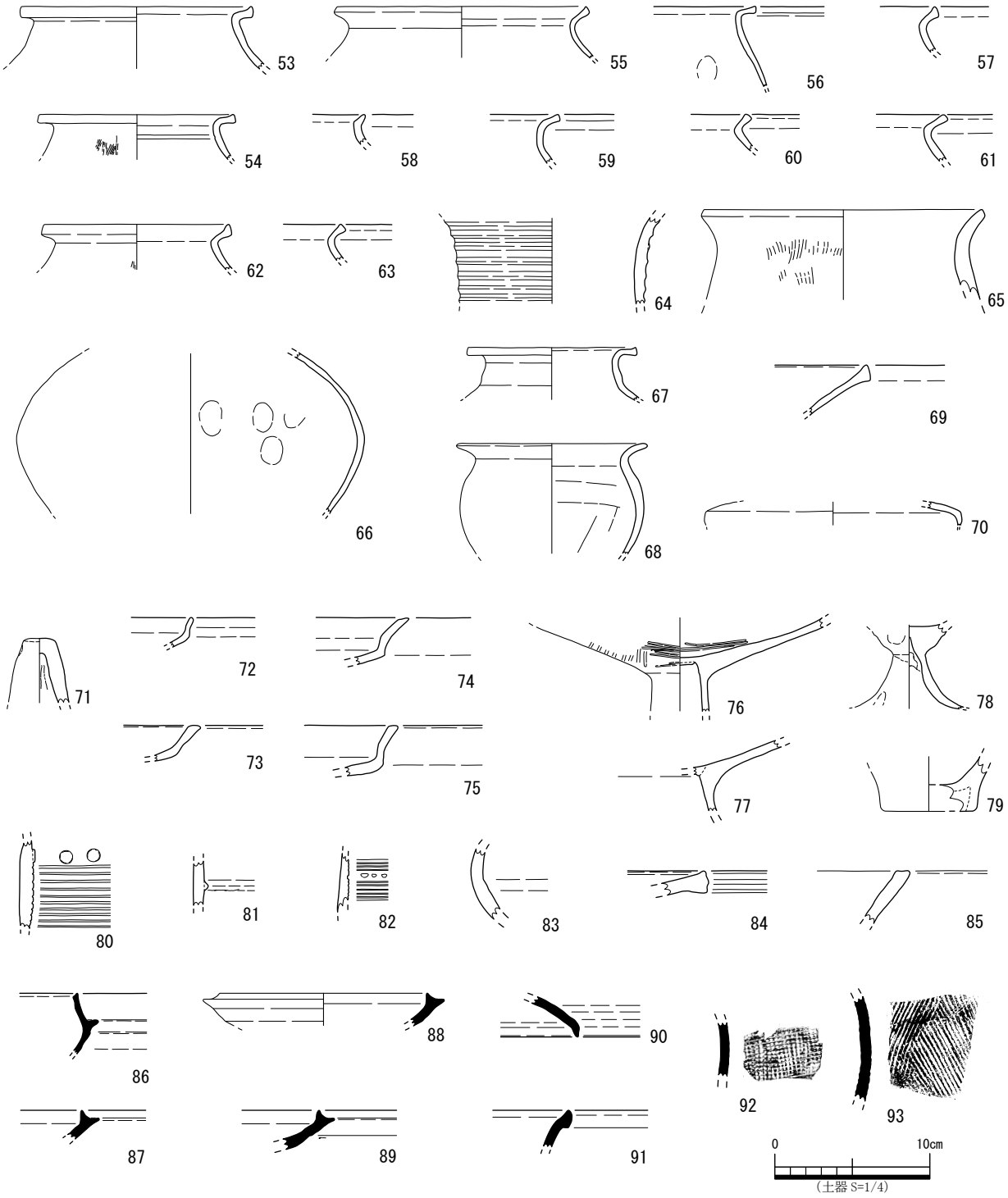
３５～８５まではＳＲ１００２の埋土から出土した弥生土器である。３５は完形に近い甕である。瀬戸内型甕、底部内面に粘土の付け足しが見られる。内外面ともに磨滅し、調整は不明である。器高は２７㎝である。時期は前期Ⅱ c 期と考えられる。３６～４７は甕の底部である。３６は底部内面に粘土を足している。３７は底部を上げ底にしたものであり、底部が厚い。３８は体部と底部の間に粘土の境目が見られることから、別々の粘土で制作したことがわかる。４０は外面にミガキが見られる。４１、４２は底部内面に粘土を足している。４３は底部を上げ底にしている。４４～４７は胎土や焼成から香東川下流域産のもと推測できる。４４は内面に板ナデが見られる。４５～４７は胎土に角閃石や雲母を含む。４８～６３は口縁部である。４８は口縁部に刺突文を有し、口縁や口縁端部内面に煤が付着する。時期は弥生時代前期後葉と考えられる。４９は口縁部から体部にかけて残存している瀬戸内型甕で、体部には１２条の沈線やヨコナデやタテハケを見られる。また、黒斑も見られる。時期は前期Ⅱａ期と考えられる。５０は口縁に近い部分はタテハケによる調整で、そこから体部にかけてはヨコナデによる調整が見られる。５１は瀬戸内型甕である。５２～６３は胎土や焼成から香東川下流域産と考えられる。５３の口縁部は屈曲に折れ曲がり、上部につまみ出している。内外面ともにナデ調整である。時期は弥生時代後期後葉と考えられる。５４も５３と同様な形状をしているが、外面にハケ目、内面に１条の沈線やヨコナデが見られる。時期は下川津Ⅱ式と考えられる。５５～５８は内外面ともにナデ調整である。時期は５５、５７が下川津Ⅰ式新相で５６が下川津Ⅰ式古相から新相と考えられる。５９の口縁は緩く曲がり削り出されている。時期は下川津Ⅰ式古層と考えられる。６０は胎土に角閃石を有する。６１は内外面ともにナデ調整をしている。６２は口縁を摘み上げ、外面の一部にハケ目が見られるが内外面全体をナデ調整している。６４～６９は壺である。６４は頸部で７条の貼り付け突帯を確認している。時期は弥生時代前期末～中期初頭と考えられる。６５の外面はハケ調整後にナデ調整を行っている。６６～６９は胎土や焼成から香東川下流域産土器と考えられる。６７は内外面ともにナデ調整で胎土に角閃石を含む。時期は下川津Ⅰ式古相と考えられる。６８は内外面ともにナデ調整で内面は粗めのナデ調整である。胎土に金雲母を含む。時期は弥生時代後期後半と考えられる。６９は胎土に角閃石を含む。７０～７８は高杯である。７０、７１は脚部である。７１は杯部が外れた状態の脚部である。内面はナデ調整や絞りを行っている。７２～７７は口縁部～体部である。また、７３～７７は胎土や焼成、技法等から香東川下流域産と考えられる。７３、７４は口縁が外反し、口縁上面が調整され、胎土に角閃石を含む。７５は口縁が前者に比べ外反せず、立ち上がる。時期は下川津Ⅱ式と考えられる。７６は外面を分割でヘラミガキ調整やナデ調整がさ



第 12 図　第 2 調査区　ＳＲ 1002 平断面図

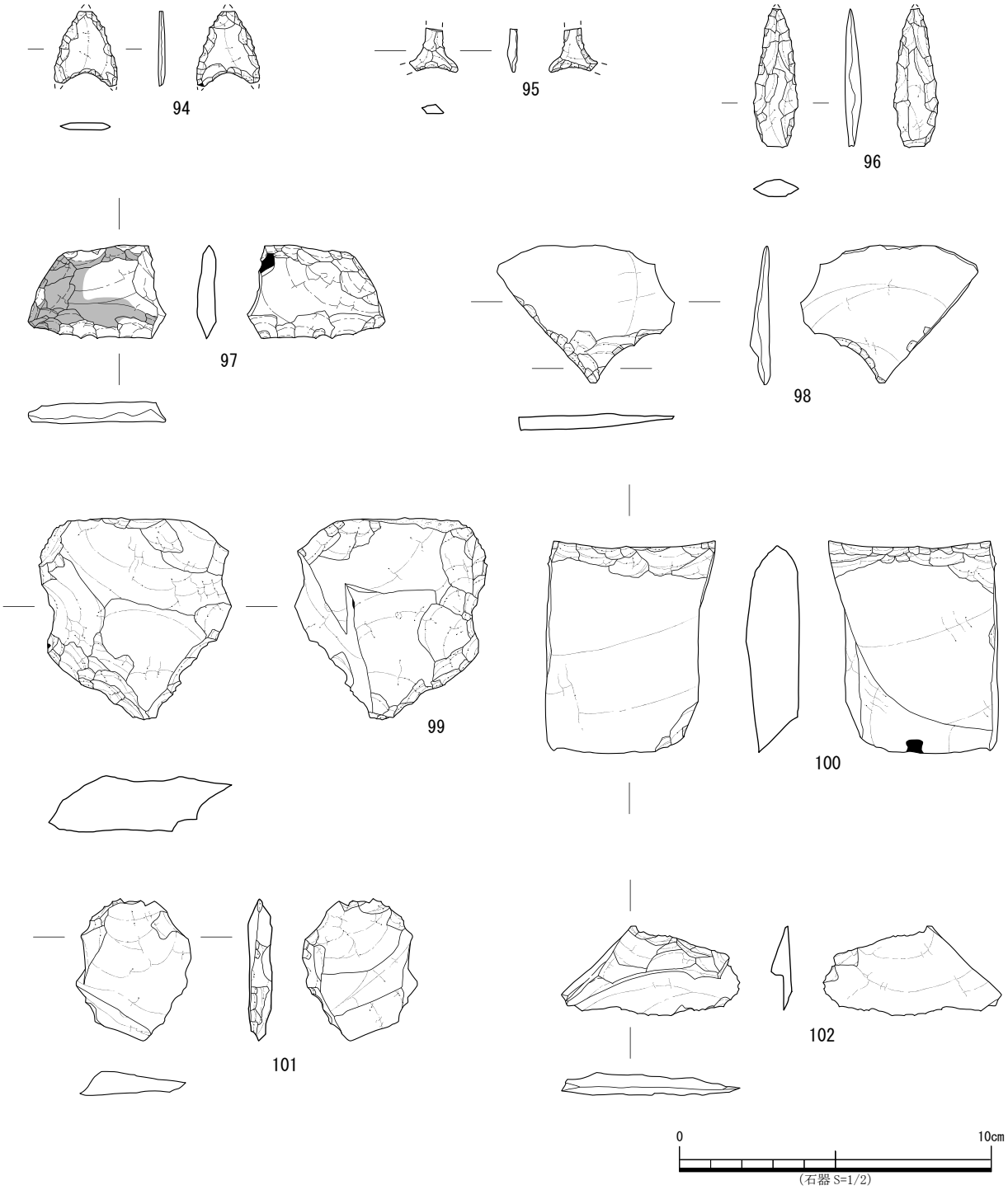


第 13 図　第２調査区　ＳＲ 1002 出土遺物①



第 14 図　第２調査区　ＳＲ 1002 出土遺物②

れ、内面もヘラミガキ調整が見られる。脚部と杯部の接合部に粘土盤の充填が見られる。時期は下川津Ｉ式新相と考えられる。７７は脚部と杯部の接合部に粘土盤の充填が見られる。７８は外面をナデ調整し、内面を脚部成形のためくり抜いた後ナデ調整を行っている。７９～８４は器種が不明確な弥生土器である。７９は底部で粘土を接合した痕跡が見られる。８０～８３は体部である。８０は外面に円形浮文２個、沈線１０条が見られる。８１は外面に貼り付け突



第 15 図　第２調査区　ＳＲ 1002 出土遺物③

帯が見られる。８２は外面に８条の沈線と刺突文が見られる。８２は他と比べ薄いが、外面に貼り付け突帯が見られる。８４は甕又は壺の口縁部で２条の沈線が見られる。８５は口縁部と考えられる。

８６～９３は須恵器である。８６～８９は杯身の口縁部である。８６はかえりがあり、端部は内傾する。時期は６世紀初頭と考えられる。８７～８９は丸く受けのある口縁部で、７世紀初頭と考えられる。９０は蓋の口縁部である。９１は甕の口縁部である。９２、９３は体部で、

９２の外面は格子叩き具による整形、９３は外面を平行叩きによる整形、内面を青海波文のあて具痕が見られる。

９４～１０２は石器で、材質はいずれもサヌカイトである。９４～９６は石鏃で、９４、９５は凹基式、９６は凸基Ｉ式である。９７はスクレイパーで使用痕が見られ、打製石包丁からの転用された可能性がある。９８は石錐である。９９は石核である。１００，１０１は剥片で一部に二次加工が見られる。１０２は微細剥離痕のある剥片である。

また、図化していないが、土器焼成時に破損した土器の剥離片が出土している（写真７－３）。

ＳＫ１０１４（第１６図）

調査区東側で確認し、東西約０．８ｍ×南北約０．６ｍ、深さ約３０㎝である。断面形状はU字状で、にぶい黄褐色極細砂等が堆積している。

遺物は第１６図‐１０３・１０４の弥生土器が出土している。１０３は甕の口縁部である。時期は前期Ｉ ｃと考えられる。１０４は甕の口縁である。瀬戸内型甕で、３条の沈線が見られる。

ＳＫ１０１５（第１６図）

調査区東側で確認し、直径約０．８ｍで、深さ約３０㎝である。断面形状はU字状で、にぶい黄褐色極細砂等が堆積している。遺物は出土しなかった。

ＳＫ１０１６（第１６図）

調査区東側で確認し、遺構の北側を確認した。確認した規模は東西約１．１ｍ×南北約０．８ｍ、深さ約４０㎝である。断面形状はU字状で、灰黄褐色シルト～極細砂層が堆積している。埋土中に円礫を含み、遺物を多量に含む。

出土遺物は第１６図－ １０５～１１２である。いずれも弥生土器の甕である。１０５は底部から体部で内外面はナデ調整が見られる。１０６は完形の甕で瀬戸内型甕である。１０７～１１１は体部から口縁部である。１０７は外面にハケ目や黒斑が見られ、内面は指押さえである。１０８は外面に黒斑が見られ、内面は指頭圧痕がある。時期は中期Ⅱ‐１と考えられる。１０９は内外面ともにナデ調整である。１１０は外面に櫛描文、内面にヨコナデ調整が見られる。口縁部は如意型である。時期は前期Ⅱ ｂ期と考えられる。１１１は外面に櫛描文とヨコナデ調整、内面にヨコナデ調整が見られる。瀬戸内型甕である。前期Ⅱ ｂ期と考えられる。

ＳＰ１０１３（第１７図）

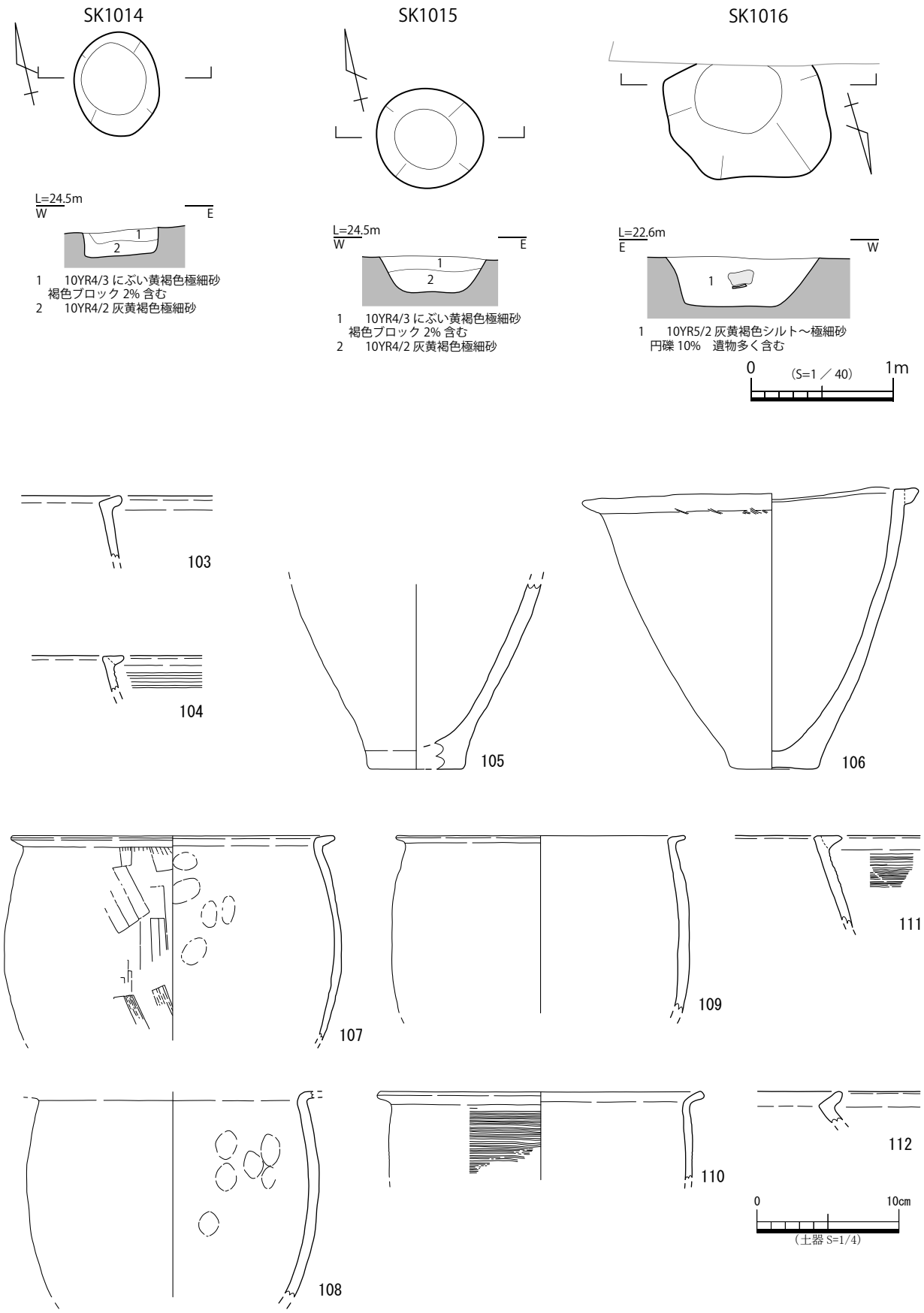
調査区東側で確認し、直径０．５ｍ、深さ約２０㎝である。断面形状はU字状で、にぶい黄褐色極細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

ＳＰ１０１４（第１７図）

調査区東側で確認し、直径０．５ｍ、深さ約２０㎝である。断面形状はU字状で、にぶい黄褐色極細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

遺構検出時出土遺物（第１７図）

１面目の遺構検出中に第１７図－ １１３の弥生土器の甕の底部と１１４の須恵器杯身の底部



第 16 図　第２調査区　ＳＫ平断面図・出土遺物

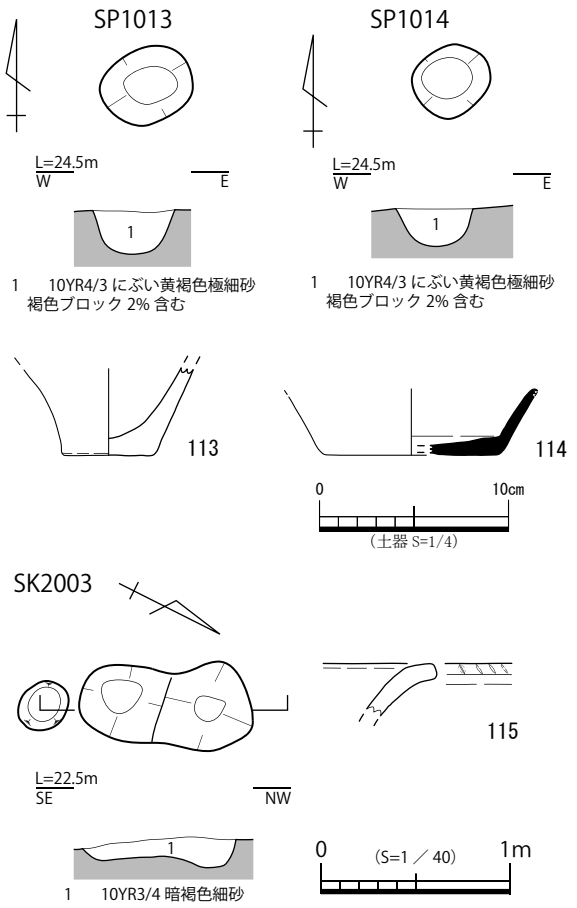
が出土した。１１４の時期は８世紀頃と考えられる。

２）２面目

ＳＫ２００３（第１７図）

調査区東側で確認し、東西約０．５ｍ×南北約１．０ｍ、深さ約２０㎝である。断面形状は不整形な楕円形で、暗褐色細砂層が堆積している。

遺物は第１７図‐１１５が出土し、弥生土器の壺と考えられる口縁部である。口縁に刺突文が見られる。



第 17 図　第２調査区　ＳＰ平断面図・出土遺物、遺構検出時出土遺物

第５節　第３調査区の遺構・遺物

第３調査区は第５調査区から南の地点で設定し、東西約５．０ｍ×南北約３．０ｍである（第１８図）。遺構面は３面確認し、他の調査区より遺構面が多い。１面目で確認した遺構はピット３基、包含層を１ヶ所確認した。２面目は土坑１基を確認した。３面目はピット２基を確認した。

１）１面目

ＳＰ１０１５（第１９図）

調査区中央で検出し、東西約０．５ｍ×南北約０．４ｍ、深さ約１０㎝である。断面形状は楕円形で、にぶい黄褐色シルト質細砂層が堆積している。検出した位置が包含層１の下面であることから、２～３面の時期に相当する遺構の可能性もある。図化していないが土器片が出土した。

ＳＰ１０１６（第１９図）

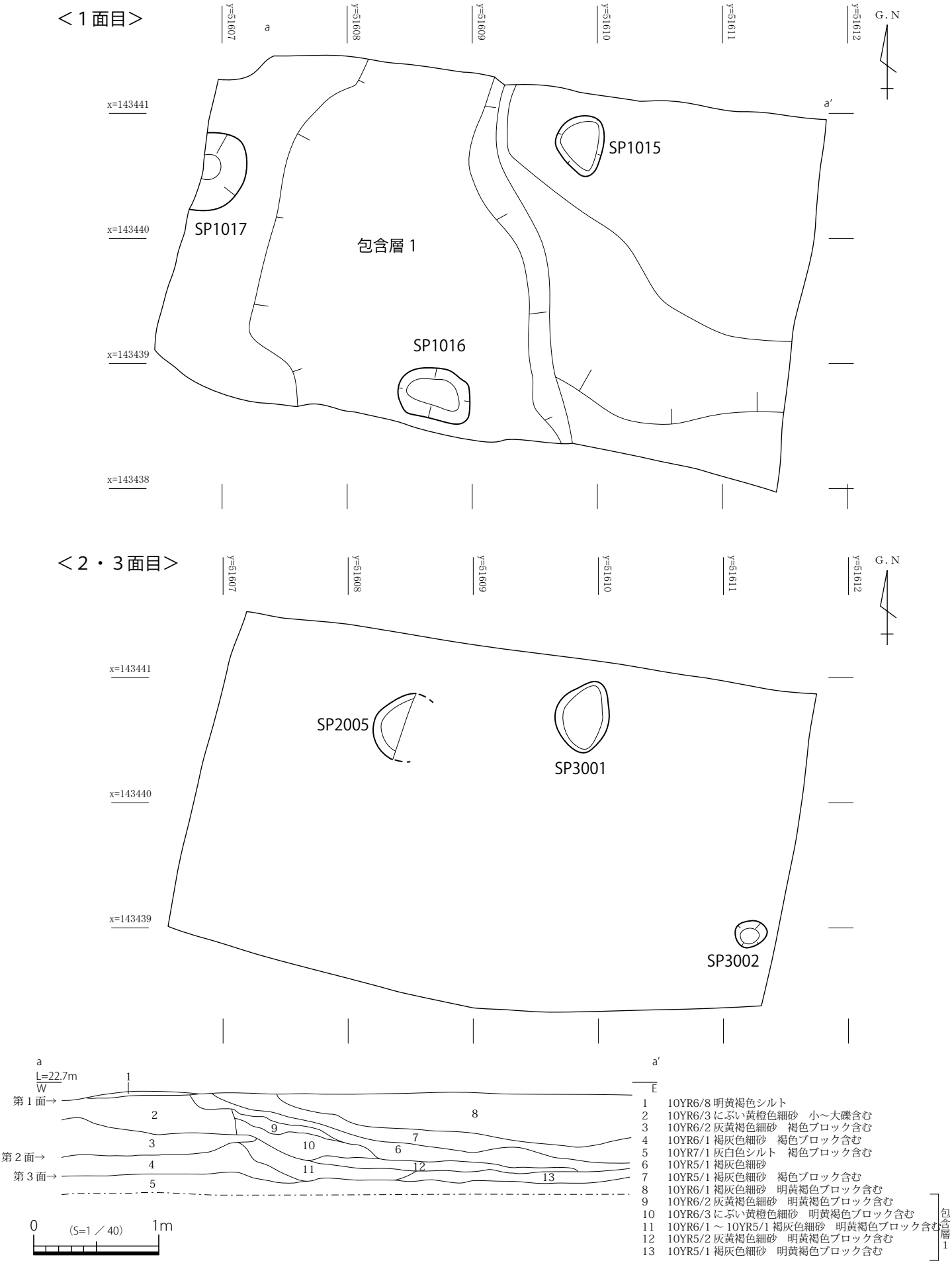
調査区中央で検出し、東西約０．６ｍ×南北０．４ｍ、深さ約３０㎝である。断面形状は方形で、暗褐色シルト質細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

ＳＰ１０１７（第１９図）

調査区西側で検出し、遺構の東側を確認した。直径約０．６ｍになると推測できる。断面から柱痕の痕跡が認められ、掘立柱建物の一部と考えられるが、調査範囲が狭小であることから対応する柱穴は検出されていない。遺物は出土しなかった。

包含層１（第１８図）

包含層１は調査区中央から東側にかけて検出し、第１面目で確認した。規模は調査区中央か



第 18 図　第３調査区　遺構配置図（１・２・3 面目）

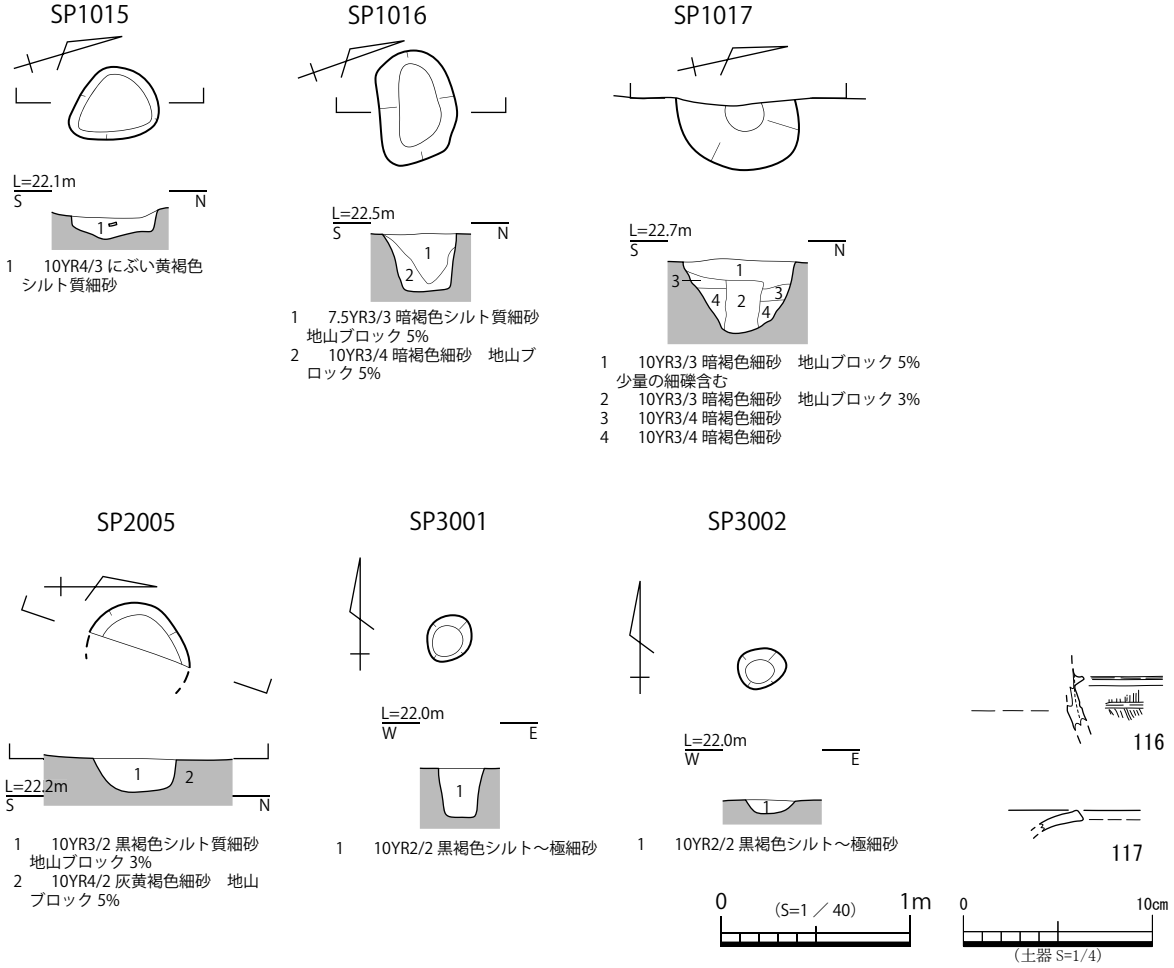
ら東側全面で確認し、深さは約６０㎝である。包含層は８層分の埋土からなり、いずれもレンズ状に堆積することから、自然堆積によるものと考えられる。埋土は褐灰色や灰黄褐色の土層が堆積し、８～１３層で地山由来と考えられる明黄褐色ブロックを含んでいる。この包含層は第５調査区の南東隅で一部を確認しているが、第２調査区では確認していない。このことから、この包含層は５調査区を北限に東側に広がると推測できる。南限は調査を行っていないため不明である。

出土遺物は第１９図－ １１６で、弥生土器の壺の口縁部と考えられる。瀬戸内甕で、外面に沈線１条やヨコナデ、タテハケ調整が見られる。

２）２面目

ＳＰ２００５（第１９図）

調査区中央で検出し、遺構の西側を確認した。直径約０．６ｍと推測できる。深さは２０㎝である。断面形状はU字状で、黒褐色シルト質細砂が堆積している。遺物は出土しなかった。



第 19 図　第３調査区　ＳＰ平断面図・出土遺物、遺構検出時出土遺物

３）３面目

ＳＰ３００１（第１９図）

調査区中央で検出し、直径約０．２ｍ、深さ約３０㎝である。断面形状は方形で、黒褐色シルト～極細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

ＳＰ３００２（第１９図）

調査区中央で検出し、直径約０．２ｍ、深さ約１０㎝である。断面形状はレンズ状で、黒褐色シルト～極細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

遺構検出時出土遺物

遺構検出中に第１９図－１１７の弥生土器の壺の口縁部が出土した。

第６節　第４調査区の遺構・遺物

第４調査区は対象地の西側に設置し、東西約１．５ｍ×南北約３３ｍで設定した（第２０図）。また、北側の一部分は東西約４ｍの幅で調査区を設定した。遺構面は１面目で多数の遺構を検出し、確認した遺構は流路跡１条、溝跡１条、ピット１６基である。遺構の多くは調査区中央から北側で確認し、中央から南側はＳＲ１００２を全体的に確認した。２面目は遺構は認められなかった。

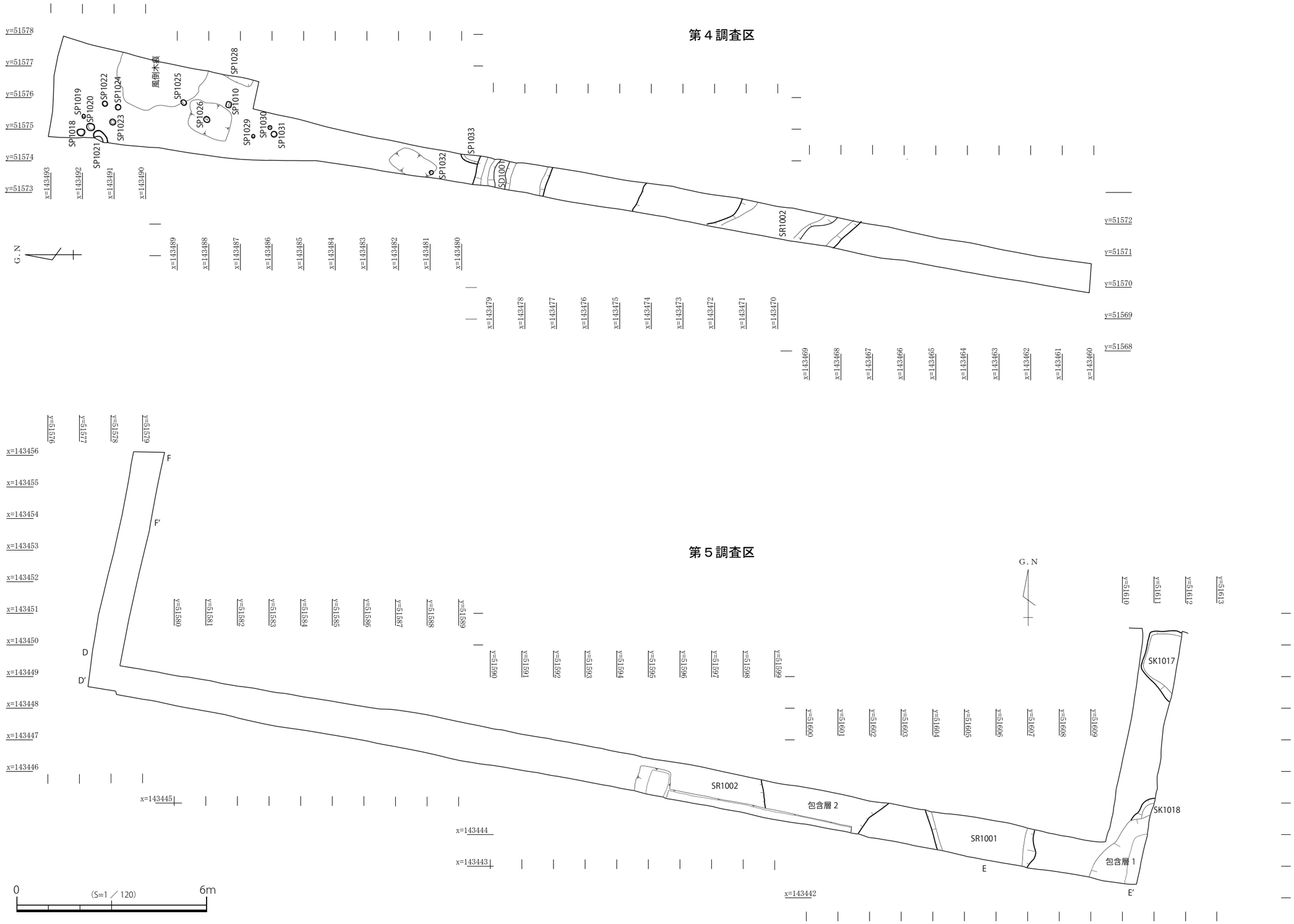
１）１面目

ＳＲ１００２（第２２図）

第４調査区で確認したＳＲ１００２は調査区中央から南側で検出し、幅約１５．５ｍ、深さ約６０㎝である。流路の形状は第２調査区と同様、中心部がU字状に深くなっている。土層の堆積構造は第２調査区とほぼ同様だが、ここでは細かく細分している。２a、２b層がにぶい黄褐色シルト～砂質層で第２調査区でいう３層にあたる。２c層は黒褐色粘質シルト層で円礫や多量の土器を含み、第２調査区の４層にあたる。３層はにぶい黄褐色粘土層である。４a層は黒褐色粘質シルトで砂礫を含み、４b層は黒褐色粘質シルト層である。３層、４a層、４b層は第２調査区の５層にあたる。５層は黒色シルトで遺物を含み、第２調査区の６層にあたる。６層は黄灰色砂層で遺物を含み、５層の埋土をラミナ状に含む。第２調査区でいう９～１１層にあたる。流路方向はNW‐ＳＥ方向になり、第２調査区から主軸が西に傾く。

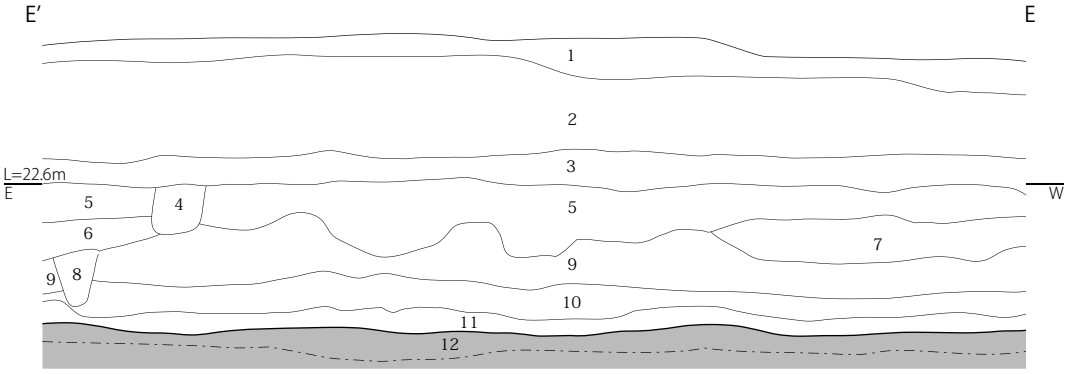
出土遺物は第２３図－ １１８～１４４である。弥生土器、須恵器、石器が出土した。１１８～１４２は弥生土器で甕や壺、高杯が出土した。

１１８～１２４は第５層より下層の流路底場から出土した。１１８は甕の体部から口縁部である。口縁は如意型で刻目文が見られる。外面は沈線３条やヨコナデ調整、煤が見られる。内面は指頭圧痕や板ナデ調整が見られる。時期は前期Ⅱ a 期と考えられる。１１９～１２１は壺の体部から口縁部である。１１９は頸部に沈線６条が見られ、内面は板ナデ調整である。１２１は口縁部内面に煤が付着している。１２２は壺の体部で外面に沈線３条が見られる。時



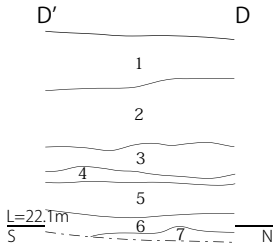
第 20 図　第４・５調査区　１面目平面図（S＝１／120）

第５調査区　南壁断面

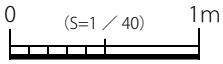


1　花崗土
2　耕作土
3　床土
4　10YR4/2 灰黄褐色細砂　地山ブロック 3%＜遺構埋土＞
5　10YR3/2 黒褐色シルト混じり細砂　３～５㎝大の礫をまれに含む（第１遺構面）
6　10YR3/1 黒褐色シルト質細砂　３～５㎝大の礫をまばらに含む
7　10YR4/3 にぶい黄褐色細砂　暗褐色粒 (Mn?) をまばらに含む
8　10YR3/3 暗褐色細砂　地山ブロック 3%＜遺構埋土＞
9　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト混じり細砂　暗褐色粒 (Mn?) を含む
10　10YR3/3 暗褐色シルト質細砂　地山ブロック 5% 含む
11　10YR4/1 褐灰色シルト質細砂　地山ブロック 7% 含む（第２遺構面）
12　10YR4/1 褐灰色シルト質細砂　風化礫を含む　粘性・しまりは 11 層より強い＜基盤層＞

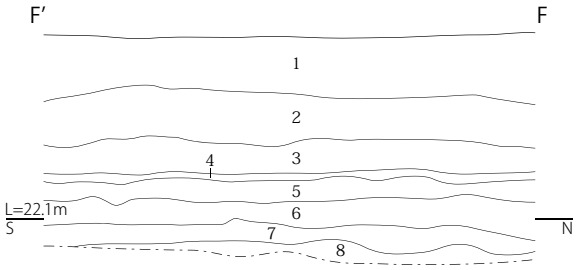
第５調査区西　西壁南側断面



1　花崗土
2　耕作土
3　床土
4　10YR4/2 灰黄褐色シルト混じり細砂
5　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質細砂　地山ブロック 3% 含む（第１遺構面）
6　10YR3/2 黒褐色シルト質細砂　わずかに中粒砂を含む　10 ～ 30 ㎜程の礫を含む
7　10YR2/2 黒褐色シルト質細砂　地山ブロック 3%　10 ～ 30 ㎜程の礫をまれに含む
8　10YR2/2 黒褐色シルト　中粒砂を含む　地山ブロック 5%　30 ～ 100 ㎜程の礫を含む



第５調査区　西壁北側断面



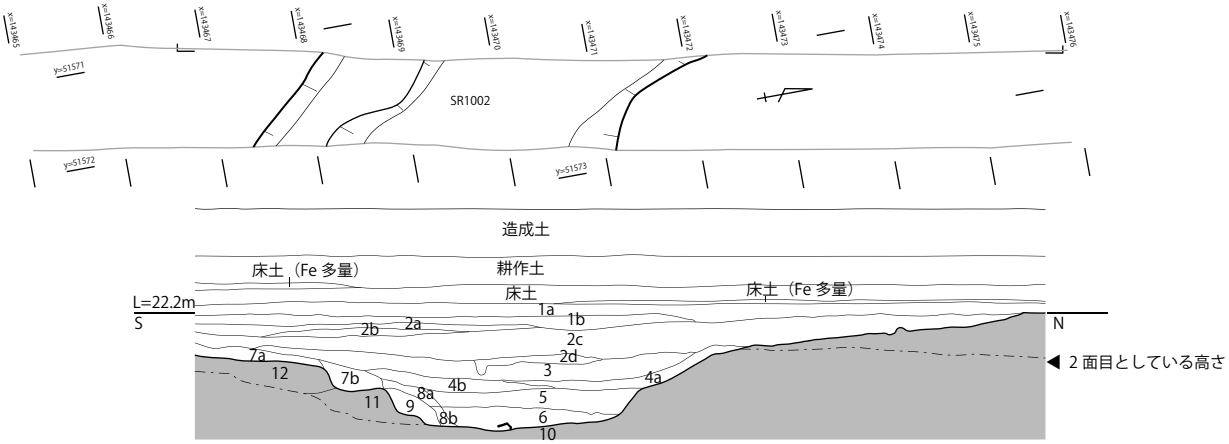
第 21 図　第５調査区　断面図

期は前期Ⅱ a 期と推定できる。１２３は壺の底部で

ある。１２４は甕又は壺の口縁部で、外面に煤が付着している。

１２５～１４４はＳＲ１００２の一括埋土から出土した遺物である。１２５～１４２は弥生土器の甕、壺、高杯である。１２５～１２７は甕の底部である。１２５は外面に指頭圧痕が見られ、内外面にナデ調整が見られる。１２７の底部は上げ底を行っている。１２８は体部で外面はナデ調整、内面は板ナデやヨコハケ調整が見られる。１２９、１３０は口縁部である。１２９は外面にハケ目が見られる。時期は下川津Ⅱ式と考えられる。１３２～１３５は壺である。１３３の外面は板ナデ調整で内面はハケ目の後板ナデ調整を行っている。１３４は体部で押圧突帯文が見られる。時期は中期Ⅱ－２と考えられる。１３５は胎土に黒雲母を含み、内外面にヨコナデ調整が見られる。１３８～１４２は高杯である。１３８は脚部で胎土に角閃石を含む。１４０は脚部で外面はナデ調整、内面は指押さえが見られる。また、円盤充填をしている可能性がある。１４１、１４２は脚部から杯身部の部分である。１４１は中心部にあった円盤充填が外れたものである。１４２は脚部の形状は垂直に立ち上がる。

１４３、１４４は須恵器である。１４３は杯身の底部である。１４４は甕の口縁部だが、他の須恵器に比べ軟質である。



1a　10YR4/1 褐灰色シルト～極細砂＜第 2 調査区 3 層＞
1b　10YR4/2 灰黄褐色シルト～砂質土
2a　10YR4/2 灰黄褐色シルト～砂質土　2c 層混じる
2b　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～砂質土
2c　10YR2/2 黒褐色粘質シルト　3 ～ 5 ㎝の円礫、遺物を多量含む
2d　10YR4/1 褐灰色粘質シルト
3　10YR4/3 にぶい黄褐色粘土　風化礫、遺物含む＜第 2 調査区 5 層＞
4a　10YR3/1 黒褐色粘質シルト　砂礫混じり
4b　10YR3/1 黒褐色粘質シルト
5　10YR2/1 黒色シルト　円礫、遺物含む
6　2.5Y4/1 黄灰色砂　遺物含む　5 層一部ラミナ状に含む
7a　10YR4/1 褐灰色粘質土　砂礫及び 12 層を含む
7b　10YR4/1 褐灰色粘質土
8a　10YR2/1 黒色シルト　砂礫を含む
8b　10YR2/1 黒色シルト
9　10YR2/1 黒色粘土＜第 2 調査区 10 層＞
10　10YR6/1 褐灰色砂　10 ～ 20 ㎝円礫を多量に含む
11　10YR7/1 灰白色シルト
12　10YR6/6 明黄褐色＋灰白色極細砂～シルト＜第 2 調査区 13 層＞

0　(S=1／80)　2m

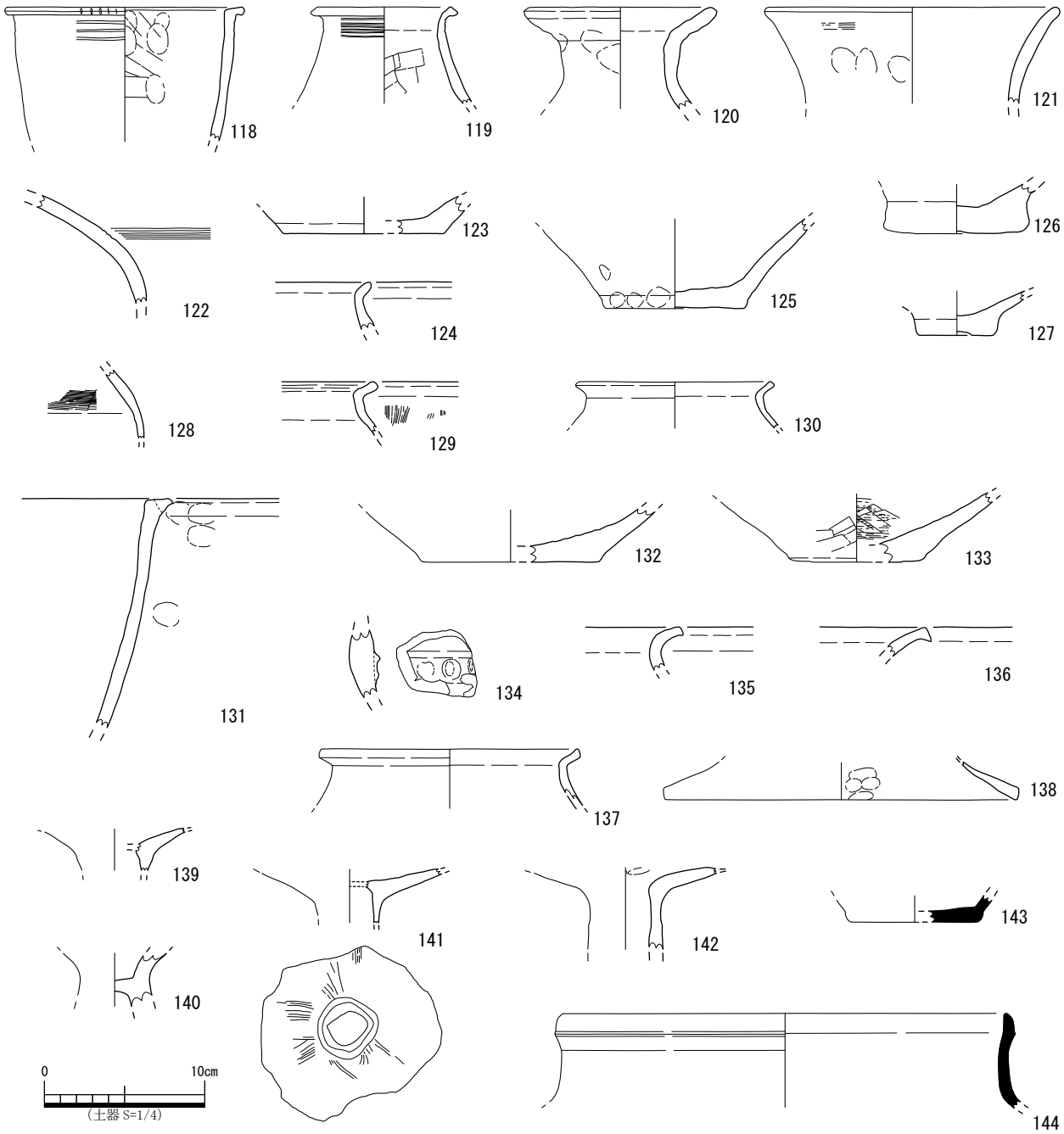
第 22 図　第４調査区　ＳＲ 1002 平断面図

ＳＤ１０１７（第２５図）

調査区中央で確認し、幅２．３ｍで東西方向に延びる溝である。図化していないが、須恵器や土師器が出土していた。

ＳＰ１０１８（第２４図）

調査区北側で確認し、直径約０．２ｍ、深さ約１０㎝である。断面形状は方形で、灰黄褐色シルト質極細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。



第 23 図　第４調査区　ＳＲ 1002 出土遺物

ＳＰ１０１９（第２４図）

調査区北側で確認し、直径約０．１ｍ、深さ約１０㎝である。断面形状はＶ字状で、にぶい黄橙色極細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

ＳＰ１０２０（第２４図）

調査区北側で確認し、直径約０．２ｍ、深さ約１０㎝である。断面形状は方形で、灰黄褐色シルト質極細砂層が堆積している。図化していないが弥生土器が出土した。

ＳＰ１０２１（第２４図）

調査区北側で遺構の東側を確認した。規模は直径約０．５ｍと推測できる。深さは約５㎝である。断面形状は不整形なレンズ状で、にぶい黄橙色シルト質極細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

ＳＰ１０２２（第２４図）

調査区北側で確認し、直径約０．２ｍ、深さは約１０㎝である。断面形状は方形で、にぶい黄橙色シルト質極細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

ＳＰ１０２３（第２４図）

調査区北側で確認し、直径約０．２ｍ、深さ約１０㎝である。断面形状は方形で、灰黄褐色シルト質極細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

ＳＰ１０２４（第２４図）

調査区北側で確認し、直径約０．２ｍ、深さ約５㎝である。断面形状は方形で、灰黄褐色シルト質極細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

ＳＰ１０２５（第２４図）

調査区北側で確認し、直径約０．２ｍ、深さ約１０㎝である。断面形状は方形で、灰黄褐色シルト質極細砂層が堆積している。図化していないが弥生土器が出土している。

ＳＰ１０２６（第２４図）

調査区北側で確認し、直径約０．２ｍ、深さ約１０㎝である。断面形状は方形で、灰黄褐色シルト質極細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

ＳＰ１０２７（第２４図）

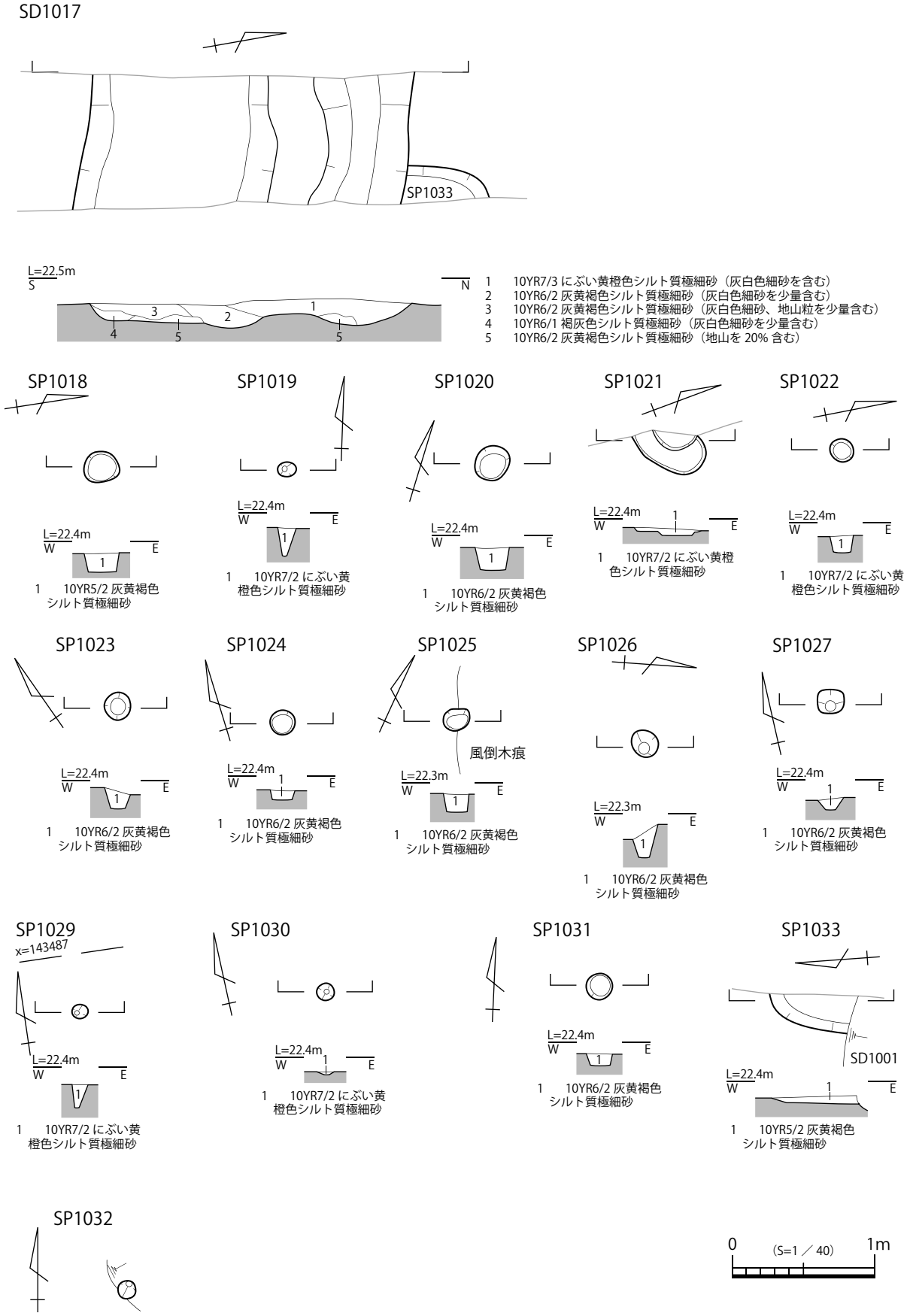
調査区北側で確認し、直径約０．２ｍ、深さ約５㎝である。断面形状は方形で、灰黄褐色シルト質極細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

ＳＰ１０２８（第２４図）

調査区北側で確認し、直径約０．２ｍである。遺物は出土しなかった。

ＳＰ１０２９（第２４図）

調査区北側で確認し、直径約０．１ｍ、深さ約１０㎝である。断面形状は方形で、にぶい黄橙色シルト質極細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。



第 24 図　第４調査区　ＳＰ・ＳＤ平断面図

ＳＰ１０３０（第２４図）

調査区北側で確認し、直径約０．１ｍ、深さ約１㎝である。断面形状はレンズ状で、にぶい黄橙色シルト質極細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

ＳＰ１０３１（第２４図）

調査区北側で確認し、直径約０．２ｍ、深さ約１０㎝である。断面形状は方形で、灰黄褐色シルト質極細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

ＳＰ１０３２（第２４図）

調査区中央で確認し、直径約０．２ｍ、深さ約１㎝である。遺物は出土しなかった。

ＳＰ１０３３（第２４図）

調査区中央で確認し、西側半分を検出した。遺構の南側はＳＤ１０１７に切られている。検出した部分は東西０．４ｍ×南北０．７ｍ、深さ約５㎝である。断面形状はレンズ状で、灰黄褐色シルト質極細砂層が堆積している。遺物は出土しなかった。

第７節　第５調査区の遺構・遺物

第５調査区は調査区南側に「コ」の字状に設定した調査区である（第２０図)。調査区は、東西方向の部分は東西約３１ｍ×南北約１．５ｍで南北方向の部分は両方とも東西約１．５ｍ×南北約８ｍである。１面目は流路跡２条、土坑２基、包含層２ヶ所を確認した。２面目では遺構は認められなかった。

ＳＲ１００１（第２０図）

調査区東側で幅５．６ｍ確認した。断面の図化していないが第２調査区で確認した部分に比べ深さが浅くなり、５～１０㎝の深さになる。この流路跡は南に向いて、浅くなると考えられる。また、遺物は出土していないことから土器が破棄された或いは埋没した地点に偏りがあると推測できる。

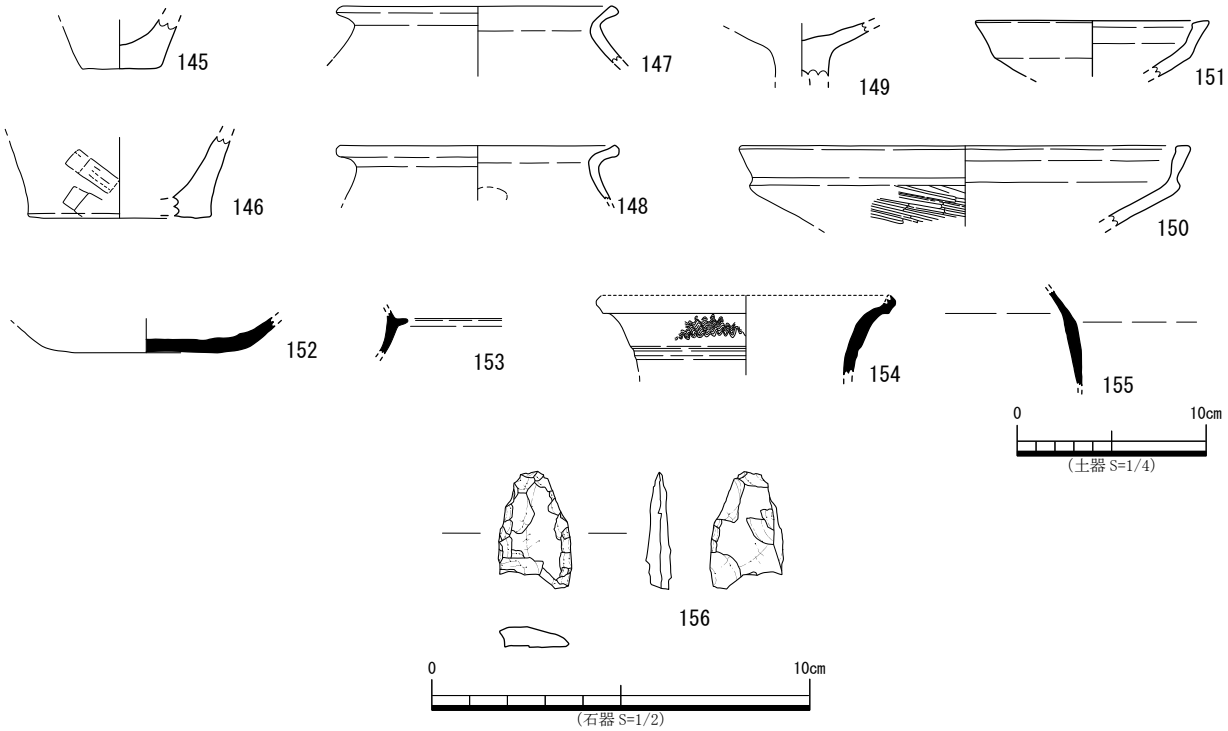
ＳＲ１００２（第２０図）

調査区中央から西側にかけて幅広く確認した。この流路跡も南側に向かい浅くなる傾向にある。流路跡の主軸としては北東流する部分と考えられる。また､東側では包含層２を切っている。

遺物は第２５図－１４５～１５６が出土し、弥生土器や須恵器、石器がある。

１４５～１５１は弥生土器である。１４５、１４６は甕の底部である。１４５は内外面ともにナデ調整で外面に黒斑が見られる。１４６は外面にハケ目、ナデ調整が見られ、外面に黒斑が見られる。

１４７、１４８は甕の口縁部である。１４７は胎土に金雲母を含む。１４８は胎土に角閃石を含む。１４９～１５１は高杯である。１４９は脚部から杯部にかけてで、粘土充填が見られない技法のタイプである。１５０、１５１は杯部である。１５０の外面にヨコナデやヘラミガキ調整が見られ、胎土に金雲母や角閃石を含む。１５１は小型の高杯で胎土に角閃石を含む。



第 25 図　第５調査区　ＳＲ 1002 出土遺物

１５２～１５４は須恵器で杯身、壺、堤瓶が出土した。１５２、１５３は杯身である。１５２は底計の推定値が１０．４㎝と大型のもと考えられる。１５３は杯身の口縁部でかえりがある。１５４は壺の口縁部から頸部の部分で、頸部に波状文が見られる。１５５は堤瓶の体部である。

１５６は石鏃の未製品で材質はサヌカイトである。

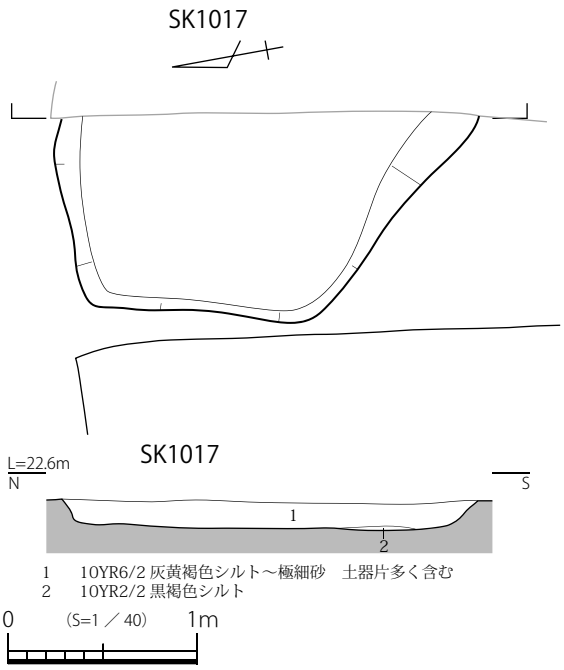
ＳＫ１０１７（第２６図）

調査区東側で確認し、遺構の西半分を検出した。確認した規模は東西約１．１ｍ×南北約２．２ｍ、深さ約１５㎝である。断面形状はレンズ状で、灰黄褐色シルト～極細砂層が堆積している。遺構からは多数の土器片が確認され、近接して第２調査区で確認されたＳＫ１０１６と同じ性格の遺構と推測できる。

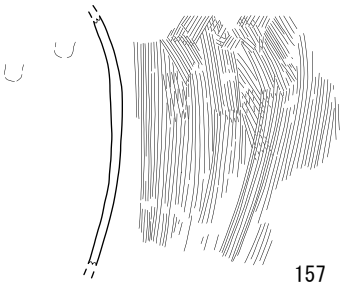
出土した遺物は第２６図‐１５７、１５８で弥生土器である。１５７は甕の体部で、外面はハケ調整があり、内面は指ナデ調整が見られる。時期は下川津Ⅱ式と考えられる。１５８は甕の口縁部である。

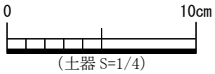
ＳＫ１０１８（第２６図）

調査区東側で確認し、遺構の西半分を確認した。確認した規模は東西約０．５ｍ×南北約０．７ｍ、深さ約２０㎝である。断面形状はU字状で灰黄褐色シルト質細砂層が堆積している。南側の包含層１を切っている。

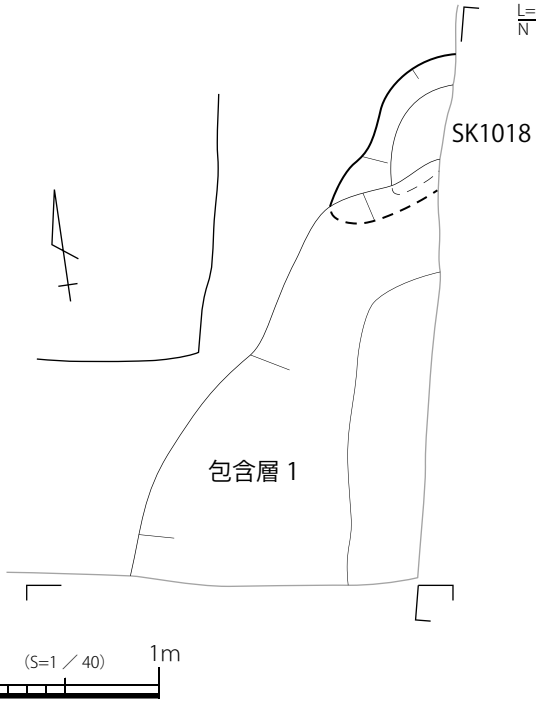


1　10YR6/2 灰黄褐色シルト～極細砂　土器片多く含む
2　10YR2/2 黒褐色シルト

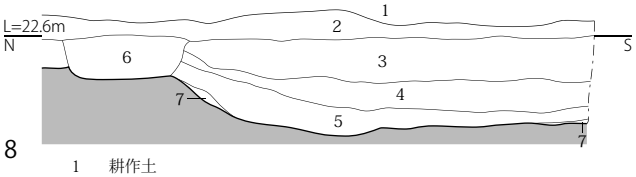




（土器 S=1/4）

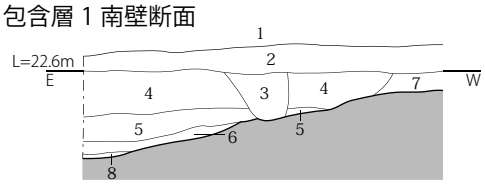


包含層 1 東壁断面

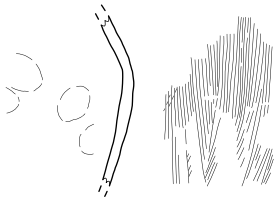


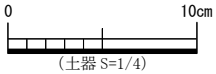
1　耕作土
2　床土
3　10YR2/2 黒褐色シルト質細砂
4　10YR2/3 黒褐色シルト質細砂　～ 30 ㎜大の礫をまれに含む
5　10YR3/2 黒褐色シルト質細砂　地山ブロック 3%
6　10YR4/2 灰黄褐色シルト質細砂　地山ブロック 5%＜SK1018＞
7　10YR3/3 暗褐色シルト質細砂　地山ブロック 5%

包含層 1 南壁断面



1　耕作土
2　床土
3　10YR4/1 褐灰色細砂　わずかにシルトを含む　地山ブロック 3%
4　10YR2/2 黒褐色シルト質細砂
5　10YR2/3 黒褐色シルト質細砂　10 ～ 30 ㎜大の礫をまばらに含む
6　10YR3/2 黒褐色シルト質細砂　地山ブロック 3%
7　10YR4/2 灰黄褐色細砂　3 ～ 5 ㎜大の礫を含む
8　10YR3/3 暗褐色シルト質細砂　地山ブロック 5%





（土器 S=1/4）

第 26 図　第５調査区　ＳＫ平断面図・出土遺物

遺物は第２６図‐１５９の弥生土器が出土した。甕の体部で外面は縦ハケ調整で、内面は指押さえである。

包含層１（第２６図）

包含層１は調査区東側で確認した。確認した規模は東西約１．６ｍ×南北約２．１ｍを確認した。第３調査区で確認した包含層１と同一のものと考えられる。一連の包含層は第２調査区では確認されていないことから大よその北限と推測できる。また、断面観察のみになるが、南側断面でピットの掘り込みが確認されている。

包含層２（第２０図）

包含層２は調査区東側で確認され、東側を確認した。確認した規模は北側の最大幅３．６ｍで南側の最小幅で３．０ｍである。包含層の西側はＳＲ１００２により切られている。

遺物は第２７図‐１６０お弥生土器の甕底部が出土した。

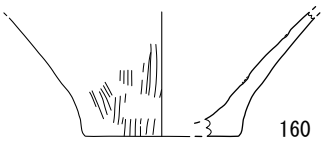
２）２面目

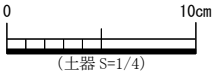
遺構は確認しなかったが、第２８図‐１６１の弥生土器が出土した。瀬戸内型甕である。

沈線３条が見られる。

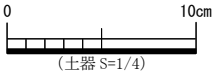
３）表採遺物

調査区全体の表採資料で第２９図‐１６２があり、弥生土器の甕の底部である。

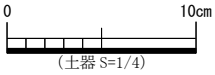




第 27 図　第５調査区　包含層出土遺物



第 28 図　第５調査区　遺構検出時出土遺物



第 29 図　表採遺物

第４章　まとめ

第１節　遺構の変遷

今回の発掘調査では弥生時代前期後半～前期末に形成されたと考えられる遺構を多数確認した。多くの遺構は１面目の旧地表面で形成され、僅かであるが、２面目でも遺構を確認した。

１面目

今回の発掘調査で最も多くの遺構を検出した面である。時期は弥生時代前期後半から弥生時代後期後半にかけての遺構がほとんどである。いくつかの遺構で時代が特定できるものがある。前期Ⅰｃ期に属する遺構は第５調査区ＳＫ１０１７が挙げられる。前期Ⅱａ～Ⅱｃ期にかけての遺構は第１調査区ＳＫ１０１２、第２調査区ＳＲ１００１、ＳＫ１０１５が挙げられる。

前期末から中期Ⅱ－１にかけての遺構として第２調査区ＳＫ１０１６が挙げられる。

ＳＲ１００２は２時期にかけて埋没したと考えられ、１回目の埋没時期（６層）は弥生時代後期後半と考えられ、２回目の埋没時期は須恵器の編年から７世紀初頭ごろに埋没したと考えられる。

２面目

第１調査区を中心に確認したＳＤ２００１、ＳＫ２００１等の遺構や第２調査区のＳＫ２００３等が挙げられる。２面目の遺構から時代を特定できる遺物が出土していないが、１面目で確認される最も古い遺構が弥生時代前期後半（前期Ⅰｃ期）であることから、この時期より古いと考えられる。

また、第３調査区では３面の遺構面を確認している。いずれの面も時代を特定できる遺物はないが、１面目は他の調査区と同一レベルで遺構面を確認していることから同時期に形成されたと考えられる。しかし、２、３面目はどの時期に形成された遺構であるかは不明である。

第２節　ＳＫ１０１２の土器焼成遺構の可能性について

第１調査区１面目で確認したＳＫ１０１２は、土坑の北側半分を調査し、埋土の状況や出土遺物から弥生時代前期末頃に使用された土器焼成遺構と推測される土坑である。埋土は５層で焼成による硬化面を確認し、３層で炭化物を含む層位で堆積した。土器は３層より上面で多量に出土した。また、少量であるが焼けた粘土塊が出土し、焼成遺構として使用された痕跡と考えられる。また、今回の調査で検出したＳＲ１００２からは土器を焼成する際に破裂したと思われる土器片が出土しており、周辺で土器焼成を行っていた可能性を指摘できる。出土した土器の年代は前期Ⅰｃ、Ⅱａ期と若干時期差があり、最終使用は前期Ⅱａ期と考えられる。

一方で、ＳＫ１０１２が土器焼成遺構と断定できない理由がいくつかある。１つ目にＳＫ１０１２で出土した遺物に焼成時に不良品と考えられる破裂した土器片が出土していない。２つ目にＳＲ１００２で出土した破裂した土器片が必ずしもＳＫ１０１２に伴うとは限らない。３つ目に時期差がある土器が出土していることから複数回の使用が推測されるが、前期Ⅰｃ

期から前期Ⅱａ期（弥生時代前期後半頃か）に同一位置で複数回にわたって土器を焼成した痕跡は今回の調査では不明である。４つ目に遺構の半分しか調査できておらず、全容が把握できていないという問題点がある。

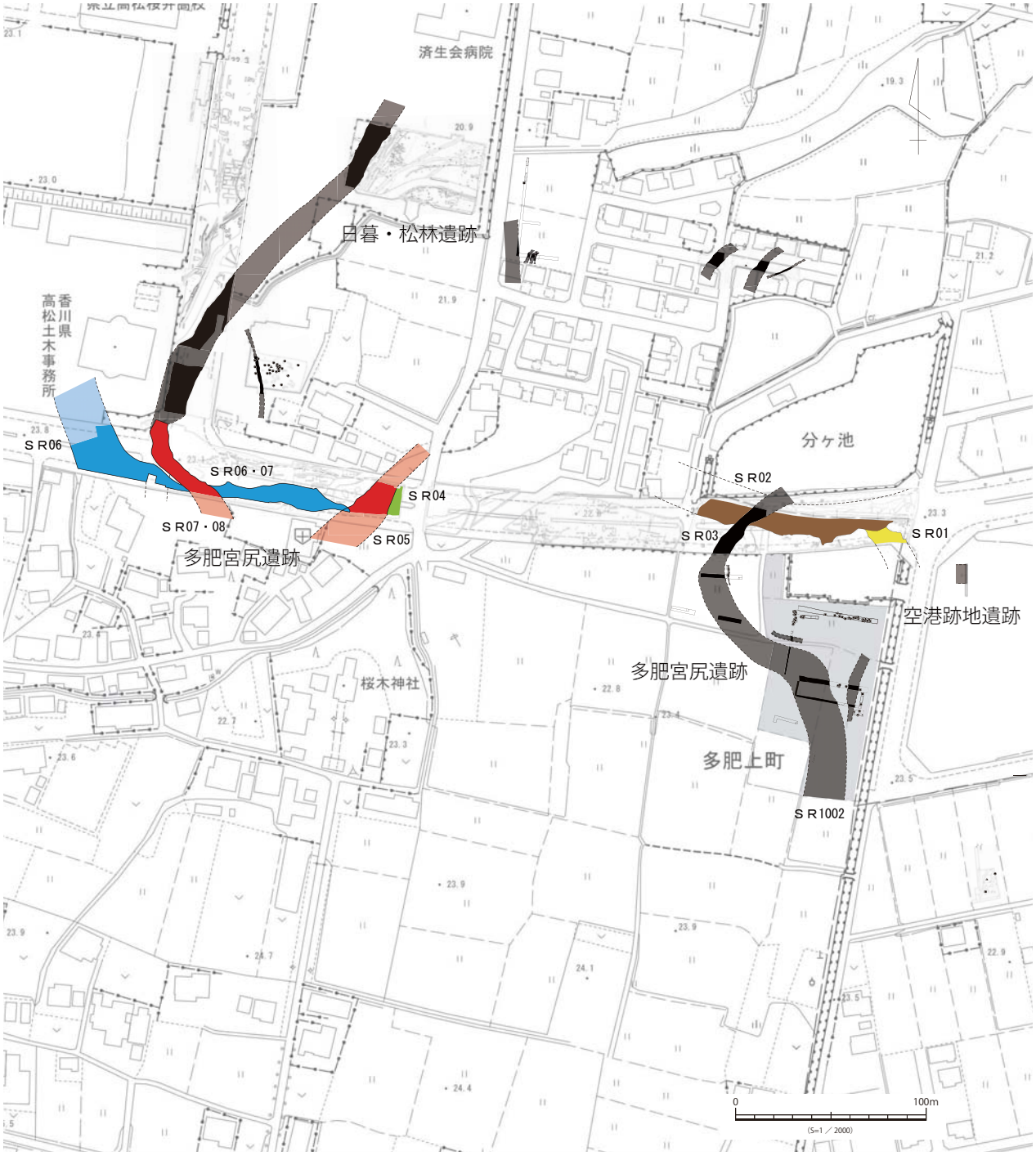
以上のことから、ＳＫ１０１２は弥生時代前期後半頃の土器焼成遺構と断定はできないものの、遺構の状況や出土遺物から焼成遺構として可能性は指摘できる。ＳＲ１００２で出土した土器片がＳＫ１０１２に伴わないものとしても周辺で土器焼成を行っていた可能性があり、今後の調査によって明らかにできることを期待する。

第３節　多肥宮尻遺跡周辺の流路跡について

今回の発掘調査で弥生時代の住居跡や流路跡等を確認したが、本節では周辺の発掘調査成果と比較し、多肥宮尻遺跡の性格について述べる。多肥宮尻遺跡周辺の流路跡は空中写真判読等から分析がされている（木下、山元２０１８）。多肥宮尻遺跡周辺の流路跡は平面形を観察すると著しく蛇行しているものがある。一般的に扇状地上の河道は直線状、その下流側に広がる自然堤防帯の河道は蛇行することが知られている。これは、砂礫質の地盤では直線状、砂やシルトが卓越する地盤では蛇行すると言い換えられる。つまり、これらの旧河道が流下した年代は、扇状地の形成が終了し、その上面を細粒堆積物が覆った時代である可能性が考えられる。高橋学氏は瀬戸内海沿岸の臨海平野の形成過程について分析し、縄文時代後期から晩期にかけて扇状地帯及び三角州帯の一部において自然堤防を構成する砂・シルトが堆積することを指摘している。香東川扇状地上の特徴的な平面形をもつ河道の形成過程に関係する可能性がある。

周辺の調査事例として当該地の北側で香川県教育委員会が県道建設工事に伴い多肥宮尻遺跡の発掘調査を行っている（木下、山元２０１８）。このうち遺構の対比できるのが位置関係等から今回の調査で確認したＳＲ１００２と香川県教育委員会の調査で確認したＳＲ１００３である。香川県教育委員会で調査したＳＲ０３は６世紀初頭から７世紀前半までに埋没したと考えられる。ＳＲ１００２の最終埋没時期は７世紀代であることから、遺構の整合性が保てる。この流路跡は当該調査地の東側で実施した試掘調査でも確認でき、第３０図のような経路をたどると考えられる（大嶋ほか２０１７）。

今回の調査地以外に周辺の流路跡を確認した遺跡は多肥宮尻遺跡や日暮・松林遺跡、空港跡地遺跡で確認できる（第３０図）。これらの流路跡は香川県教育委員会が分析した流路跡の復元図とほぼ一致するが、発掘調査でより細かく流路跡の形成を読み解くことができた。都市計画道路建設工事に伴う多肥松林遺跡で検出したＳＲ０２は須恵器や土師質土器、白磁等多数の土器が出土した（山本・中西１９９７）。埋没過程は３時期確認され、古墳時代後期から埋没が始まり、中世初頭に完全に埋まった。また、香川県教育委員会が実施した県道建設工事に伴う多肥宮尻遺跡では上記で記したＳＲ０３以外に７本の流路跡を検出した。ＳＲ０１は出土遺物から縄文時代晩期末から弥生時代前期前葉の時期に位置し、最も古い時期の流路跡である。Ｓ



第 30 図　周辺遺跡流路位置図

Ｒ０２は縄文時代晩期末から弥生時代前期前葉、弥生時代前期中葉、弥生時代後期前葉を主体とした遺物が出土した。ＳＲ０３は６世紀末から７世紀前半までに埋没した。ＳＲ０４は古代の流路跡、ＳＲ０５は近世の流路跡と考えられる。ＳＲ０６～０８は遺構が重複した形で確認した。ＳＲ０６は２時期の堆積過程を確認し、下層は弥生時代中期中葉、中層は弥生時代後期前半、弥生時代後期終末から古墳時代前半、古墳時代後期の遺物が混在する。ＳＲ０７は古墳時代後期の遺物が主体である。ＳＲ０８は古代～中世にかけての遺物が出土した。遺構の変遷はＳＲ０１→０２→０６→０７→０３→０４→０８→０５となる。空港跡地遺跡は試掘調査で東西軸の流路跡を確認した（大嶋ほか２０１６）。

周辺の流路跡を比較すると埋没時期が併行関係にある流路跡は日暮・松林遺跡ＳＲ０２と県道建設工事に伴う調査した多肥宮尻遺跡ＳＲ０８のみである。基本的には埋没した流路跡の後に自然的あるいは人工的に新たな流路跡が設定される傾向にある。自然流路は当時の人々の生活に欠かせないものと考えられ、常に維持管理や新設が図られたと推測される。このように流路跡が長期間にわたり複数箇所認められた要因として自然的要因や人工的要因により流水状況が変化したと考えられる。自然的要因は洪水よる流路の埋没や出水[(1)]の枯渇等が推測できる。近世以前に出水を利用した灌漑施設の可能性はすでに指摘され、当時の人々も活用した可能性がある（木下、山元２０１８）。人工的要因は集落域の移動等が考えられる。多肥宮尻遺跡をはじめ周辺の日暮・松林遺跡、空港跡地遺跡では集落の形成時期が異なることから、集落の中心地に向け流路を引いた可能性がある。周辺遺跡で今回調査した流路跡と同時期になる溝跡は複数カ所確認でき、自然流路との関連性は不明だが、流路から生活用水等に使用されたと推測される。いずれもの可能性も周辺遺跡の再評価や今後の発掘調査により実態の解明が求められる。

（1）出水とは香川県固有の名称で、井壺を掘って用水を湧出させ用水路で下流に灌漑する施設である。

第４節　まとめ

１）遺構について

今回の調査は弥生時代前期後半～前期末、弥生時代後期を中心とした遺構・遺物を確認した。顕著な遺構として流路跡（ＳＲ１００２）や土器焼成遺構と考えられる土坑（ＳＫ１０１２）等を検出した。流路跡は周辺の調査と比較することができ、自然流路の一端を復元することができた。土器焼成土坑は調査例が少ないこと等から断定できないが、当時の生活状況を知る上で重要な遺構と考えられる。また、住居跡が１棟のみしか検出できなかったのは当該地が空港跡地周辺の地形から台地の縁辺部にあたることを考慮すると集落域の外れであると推測できる。

２）遺物について

遺物は弥生時代前期後半から中期初頭、弥生時代後期後半頃の弥生土器や須恵器等が出土した。弥生時代前期後半から中期初頭（前期Ｉｃ期～中期Ｉａ期）にかけての弥生土器は多様な施文が施される。中には口縁部に接して突帯を張り付ける所謂瀬戸内型甕が確認できる。

弥生時代後期頃の弥生土器はＳＲ１００２を中心に下川津Ⅰ式、Ⅱ式を中心に出土し、弥生時代後期前半頃ものが多い。中には下川津Ⅰ式よりも古相と考えられる土器も確認される。（第１３図‐３２等)。これらの土器は南谷Ⅰ～Ⅱ式頃のものと併行関係の時期と考えられ、弥生時代後期前葉頃と推測するが、小片であることから断定はできない。弥生時代後期の土器は角閃石を含み胎土が比較的よく、色調が褐茶色系の土器が多く、いわゆる香東川下流域産土器と考えられる。中には金雲母が含有する土器もある。しかし、すべての土器で角閃石を含有していない。今回は含有率の割合や器種ごとの分析ができなかったが、角閃石を有する土器は搬入品である可能性がある。

参考文献

山本英之・中西克也　１９９７『日暮・松林遺跡-都市計画道路福岡多肥上町線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』高松市教育委員会

川畑聰・小川賢　２００４『多肥宮尻遺跡‐宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書‐』高松市教育委員会

大嶋和則　２００６『多肥宮尻遺跡‐衣料品販売店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書‐』高松市教育委員会

大嶋和則ほか　２０１６「空港跡地遺跡」『高松市内遺跡発掘調査概報－平成２７年度国庫補助事業－』高松市教育委員会

大嶋和則ほか　２０１７「多肥宮尻遺跡」『高松市内遺跡発掘調査概報－平成２８年度国庫補助事業－』高松市教育委員会

木下晴一、山元素子　２０１８『多肥宮尻遺跡‐県道太田上町志度線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告‐』香川県教育委員会

表１　遺物観察表①

SH1001（第１調査区）　土器一覧

遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土		焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面				
1	埋土	弥生土器	甕？	口縁	－	－	[1.5]	ヨコナデ	ヨコナデ	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR5/4にぶい褐	普	1mm以下の石英・長石を含む	良	

SK1012（第１調査区）　土器一覧

遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土		焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面				
2	埋土	弥生土器	甕	口縁～体部	－	－	[14.9]	指頭圧後ナデ、沈線3条	指頭圧後ナデ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR4/2灰黄褐	粗	4mm以下の石英・長石を多量に含む	良	外面:黒斑有 外面体部:縄目叩きか？
3	埋土	弥生土器	壺	口縁	(20.8)	－	[6.4]	ヨコナデ、縦ハケ	ヨコナデ、摩滅	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	普	2mm以下の黒色粒、4mm以下の石英・長石・赤色粒、5mm以下の砂粒含む	良	
4	埋土	弥生土器	甕	口縁	－	－	[6.0]	ヨコナデ、板ナデ、刻目、摩滅、剥離	ヨコナデ、ナデ	10YR8/2灰白	7.5YR6/4にぶい橙・10YR8/2灰白	粗	1.5mm以下の赤色粒、6mm以下の砂粒含む	良	瀬戸内型甕
5	埋土	弥生土器	甕	口縁～肩	－	－	[3.8]	ヨコナデ、指ナデ、沈線3条	ヨコナデ	10YR4/1褐灰	7.5YR7/6橙～7.5YR4/1褐灰	普	3mm以下の石英・赤色粒含む	良	
6	埋土	弥生土器	不明	肩	－	－	[4.5]	ナデ、沈線2条	ナデ	2.5YR5/6明赤褐	10YR6/3にぶい黄橙	粗	3mm以下の石英・長石を多量に含む	良	
7	埋土	弥生土器	甕	口縁	－	－	[2.1]	ナデ	ナデ、摩滅	7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙	普	2mm以下の石英・長石・黒色粒を含む	良	
8	埋土	弥生土器	不明	体部(突帯)	－	－	[2.5]	ナデ、貼付突帯、刻目、摩滅	ナデ、摩滅	10YR7/6明黄褐	2.5Y6/3にぶい黄	粗	2mm以下の石英・長石を多量に含む	良	

SK1012（第１調査区）　石器一覧

遺物番号	出土遺構	種別	石材	法量				備考
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
9	埋土	石鏃	サヌカイト	3.05	2.3	0.45	2.5	

SR1001（第２調査区）　土器一覧

遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土		焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面				
10	第4層	弥生土器	甕	底部	－	(6.9)	[5.6]	ナデ	ナデ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR8/2灰白	普	4mm以下の石英・長石を多量に含む	良	外面:黒斑有
11	第4層	弥生土器	甕	底部	－	(6.6)	[4.7]	ナデ、ハケ目	板ナデ	7.5YR7/4にぶい橙	10YR5/2灰黄褐	普	1mm以下の赤色粒、3.5mm以下の石英・長石・砂粒含む	良	
12	埋土	弥生土器	甕	底部	－	6.6	[3.2]	ナデ	指頭圧後ナデ	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	普	4mm以下の石英・長石を多量に含む	良	
13	埋土	弥生土器	甕	底部	－	(7.4)	[4.2]	ナデ	ナデ、指頭圧	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	粗	3mm以下の石英・長石を多量に含む	良	外面:付着物有
14	埋土	弥生土器	甕	体部	－	－	[6.8]	縦ハケ、剥離	ナデ、剥離	7.5YR6/4にぶい橙	10YR7/1灰白	普	3mm以下の石英・長石・砂粒を含む	良	
15	埋土	弥生土器	甕	口縁	－	－	[5.0]	ナデ、沈線1条	ナデ	10YR5/4にぶい黄褐	7.5YR5/8明褐	粗	6mm以下の石英・長石を多量に含む	良	
16	埋土	弥生土器	甕	口縁	－	－	[3.0]	ナデ	ナデ、粘土接合痕	7.5YR6/6橙	10YR8/3浅黄橙	普	1mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	
17	埋土	弥生土器	壺	口縁	－	－	[2.6]	ナデ	ナデ	10YR6/2灰黄褐	10YR6/3にぶい黄橙	粗	5mm以下の砂粒含む	良	
18	埋土	土師質土器	足釜	脚部	(5.9)	(1.8)	[1.4]	ナデ	－	7.5YR6/6橙	－	普	1mm以下の赤色粒、3.5mm以下の石英・長石・砂粒含む	良	

SR1002（第２調査区）　土器一覧

遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土		焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面				
19	第6層	弥生土器	甕	底部	－	7.3	－	ナデ	指頭圧後ナデ	2.5Y7/3浅黄	5Y4/1灰	粗	8mm以下の石英・長石・赤色粒を多量に含む	良	
20	第6層	弥生土器	甕	底部	－	(6.4)	[3.4]	ナデ	ナデ、粘土接合痕	2.5Y7/2灰黄	2.5Y7/2灰黄	精良	3mm以下の石英・長石を少量含む	良	内面:付着物有
21	第6層	弥生土器	甕	底部	－	(6.6)	[3.2]	ナデ、ヨコナデ	指頭圧後ナデ	2.5Y7/2灰黄	2.5Y7/2灰黄	普	4mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	内面:工具痕

表２　遺物観察表②

SR1002（第2調査区）　土器一覧

遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
22	第6層	弥生土器	甕	底部	－	5.5	[5.8]	ナデ、摩滅	ナデ、摩滅	10YR6/2灰黄褐	10YR4/2灰黄褐	粗　0.1～5mm大の石英・長石を含む	不良	
23	第6層	弥生土器	甕	体部	長さ 3.8	幅 4.9	厚さ 0.9	縦ハケ	ナデ	N3/暗灰	2.5Y6/2灰黄	普　4mm以下の石英・長石を含む	良	外面:黒斑有
24	第6層	弥生土器	蓋		(5.3)	－	[4.0]	ナデ、剥離、円孔4個	ナデ、剥離	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/3淡黄	粗　4mm以下の石英・長石を含む	良	底部:煤付着
25	第6層	弥生土器	壺	体部	－	－	[10.2]	ヘラ削り	ナデ、摩滅	2.5Y8/3淡黄	2.5Y7/2灰黄	粗　3mm以下の長石、6mm以下の石英を含む	良	
26	第6層	弥生土器	壺	口縁	－	－	[2.6]	ナデ、削り	横ナデ	10YR5/4にぶい黄褐	7.5YR6/4にぶい橙	普　1mm以下の長石・角閃石・赤色粒を含む	良	
27	第6層	弥生土器	不明	口縁	－	－	(2.0)	ナデ	ナデ	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/6橙	普　3mm以下の長石・赤色粒を含む	良	
28	第4層	弥生土器	甕	底部	－	(8.5)	[6.5]	ナデ	ナデ	2.5Y8/3淡黄	10YR7/2にぶい黄橙	粗　4mm以下の赤色粒、5mm以下の石英・長石を含む	良	外面:黒斑有 粘土紐接合痕
29	第4層	弥生土器	甕	底部	－	(9.0)	[7.6]	ナデ	ナデ、指頭圧	10YR8/3浅黄橙	2.5Y8/2灰白	粗　6mm以下の石英・長石を多量に含む	良	
30	第4層	弥生土器	甕	底部	－	(7.8)	[3.9]	ナデ	ナデ、指頭圧	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	粗　5mm以下の石英・長石を含む	良	
31	第4層	弥生土器	甕	体部	－	－	[18.2]	ヨコナデ	ヨコナデ、指押さえ	5YR5/6明赤褐	7.5YR5/2灰褐	普　8.5mm以下の石英、5mm以下の長石を含む	良	
32	第4層	弥生土器	壺	口縁	－	－	[2.0]	ヨコナデ、指頭圧	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR5/6明褐	普　1mm程度の金雲母・角閃石、3mm以下の石英を含む	良	
33	第4層	弥生土器	製塩土器	脚部	－	－	[4.7]	削り	指頭圧後ナデ後削り	2.5Y6/2灰黄・2.5Y5/1黄灰	10YR8/4浅黄橙	普　4mm以下の石英・長石を含む	良	
34	第4層	弥生土器	製塩土器	脚部？	－	(3.7)	[2.3]	ナデ	ナデ	5YR5/6明赤褐	7.5YR5/4にぶい褐	普　1mm程度の角閃石、3mm以下の石英を含む	良	
35	埋土	弥生土器	甕	完形	(22.2)	(7.8)	27.0	ナデ、摩滅	摩滅	5YR6/6橙	5YR7/6橙	良　3mm以下の石英・長石を含む	良	接合痕有 瀬戸内型甕
36	埋土	弥生土器	甕	底部	－	(9.0)	[4.7]	ナデ、摩滅	指ナデ、摩滅	2.5Y8/2灰白	2.5Y6/1黄灰	粗　1～5mm大の石英長石赤色粒を多く含む	不良	底部内面:粘土充填
37	埋土	弥生土器	甕	底部	－	(7.8)	[5.9]	摩滅	摩滅	10YR8/3浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	粗　3mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	
38	埋土	弥生土器	甕	底部	－	(8.6)	[3.6]	摩滅、ナデ	摩滅、横ナデ、ナデ	10YR8/3浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	普　3mm以下の石英・長石を含む	良	粘土接合痕
39	埋土	弥生土器	甕	底部～体部	－	(8.8)	[6.7]	ナデ	摩滅	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	普　1～3mmの石英・長石・赤色粒を含む	良	
40	埋土	弥生土器	甕	底部	－	5.6	[4.3]	ミガキ、摩滅	摩滅	10YR7/2にぶい黄橙	2.5Y5/1黄灰	普　2mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒を含む	良	内面:黒斑有
41	埋土	弥生土器	甕	底部	－	(6.4)	[4.9]	摩滅	摩滅	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	普　2mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒を含む	良	底面:接合痕
42	埋土	弥生土器	甕	底部	－	(6.8)	[5.5]	摩滅	摩滅	10YR8/3浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	普　3mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒を含む	良	
43	埋土	弥生土器	甕	底部	－	(9.4)	[3.5]	摩滅、指押さえ	摩滅	10YR7/2にぶい黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	普　2mm以下の石英・長石を含む	良	
44	埋土	弥生土器	甕	底部	－	6.8	[3.4]	ナデ	板ナデ、ナデ	5YR4/6赤褐	5YR5/6明赤褐	普　3mm以下の石英・長石を含む	良	外面:黒斑有
45	埋土	弥生土器	甕	底部	－	(5.6)	[2.2]	摩滅	摩滅	10YR6/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	普　2mm以下の石英・長石・雲母・赤色粒を含む	良	外面:黒色化
46	埋土	弥生土器	甕	底部	－	(6.8)	[2.9]	ナデ	摩滅	10YR6/4にぶい黄橙	7.5YR6/6橙	普　1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良	
47	埋土	弥生土器	甕	底部	－	(5.4)	[2.2]	摩滅	摩滅	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	普　2mm以下の石英・長石・雲母・赤色粒を含む	良	底面:黒色化
48	埋土	弥生土器	甕	口縁	(17.6)	－	[7.0]	ヨコナデ、ハケ目、刻目（刺突文）	ヨコナデ	2.5Y7/3浅黄	2.5Y7/3浅黄	普　3mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒を含む	良	口縁端部内面:煤化
49	埋土	弥生土器	甕	口縁～体部	(19.6)	－	[15.7]	ヨコナデ、沈線12条、縦ハケ	ナデ	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	普　2mm以下の石英・長石を含む	良	黒斑有 瀬戸内型甕
50	埋土	弥生土器	甕	口縁～体部	(16.0)	－	[8.0]	縦ハケ、ヨコナデ、ナデ、摩滅	ヨコナデ、摩滅	5YR5/4にぶい赤褐	7.5YR6/4にぶい橙	普　3mm以下の石英・長石を含む	良	
51	埋土	弥生土器	甕	口縁	－	－	[3.2]	ナデ後摩滅	ナデ後摩滅	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/3淡黄	普　3mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	瀬戸内型甕
52	埋土	弥生土器	甕	口縁	－	－	[2.1]	ヨコナデ	ヨコナデ	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR5/4にぶい褐	普　2mm以下の石英・長石を含む	良	
53	埋土	弥生土器	甕	口縁	(14.8)	－	[4.0]	ナデ	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR6/3にぶい黄橙	普　2mm以下の石英・長石・雲母・赤色粒を含む	良	

表３　遺物観察表③

SR1002（第2調査区）　土器一覧

遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
54	埋土	弥生土器	甕	口縁	(12.6)	－	[2.9]	ヨコナデ、ハケ目	ヨコナデ、ナデ、ヘラ描沈線1条	10YR5/3にぶい黄褐	10YR6/3にぶい黄橙	普　0.1～1mmの石英・長石を含む	良好	
55	埋土	弥生土器	甕	口縁	(16.0)	－	[3.3]	ナデ	ナデ	7.5YR7/4にぶい橙	10YR6/3にぶい黄橙	普　2mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	
56	埋土	弥生土器	甕	口縁	－	－	[5.1]	ナデ	ナデ	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	普　1mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	
57	埋土	弥生土器	甕	口縁	－	－	[3.0]	ナデ	ナデ	7.5YR5/6明褐	7.5YR5/6明褐	普　2mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	
58	埋土	弥生土器	甕	口縁	－	－	[1.5]	ナデ	ナデ	7.5YR5/6明褐	7.5YR5/4にぶい褐	普　2mm以下の石英・長石・角閃石・赤色粒を含む	良	
59	埋土	弥生土器	甕	口縁	－	－	[3.1]	摩滅	摩滅	7.5YR5/6明褐	7.5YR5/6明褐	普　2mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	
60	埋土	弥生土器	甕	口縁	－	－	[2.4]	ナデ	ナデ	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	普　1mm以下の石英・長石・雲母・赤色粒を含む	良	
61	埋土	弥生土器	甕	口縁	－	－	[3.0]	ナデ	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐	10YR5/3にぶい黄褐	普　2mm以下の石英・長石を含む	良好	
62	埋土	弥生土器	甕	口縁	(12.0)	－	[2.9]	ヨコナデ、ナデ、ハケ目	ヨコナデ、ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	普　1mm以下の石英・長石を含む	良好	
63	埋土	弥生土器	甕	口縁	－	－	[2.3]	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	5YR5/4にぶい赤褐	5YR5/4にぶい赤褐	普　1mm以下の石英・長石を含む	良	
64	埋土	弥生土器	壺	頸部	－	－	[5.5]	貼付突帯7条	摩滅	7.5YR7/6橙	10YR8/2灰白	普　3mm以下の石英・長石を含む	良	
65	埋土	弥生土器	壺	口縁	(18.0)	－	[5.8]	ナデ、ハケ後ナデ	摩滅	10YR8/3浅黄橙	7.5YR7/6橙	普　2mm以下の石英・長石を含む	良	
66	埋土	弥生土器	壺	体部	－	－	[10.4]	摩滅	指押さえ、ナデ	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR6/3にぶい褐	普　1mm大の赤色粒、2mm以下の石英・長石を含む	良	
67	埋土	弥生土器	壺	口縁	(10.8)	－	[3.4]	ナデ	ナデ	2.5YR4/6赤褐	7.5YR5/4にぶい褐	普　1mm大の雲母・赤色粒、3mm以下の石英・長石角閃石を含む	良	
68	埋土	弥生土器	壺	口縁～体部	(11.8)	－	[7.1]	ヨコナデ、ナデ	ナデ	10YR8/2灰白	7.5YR6/6橙	良　2mm以下の石英・長石・金雲母を含む	良	黒斑有
69	埋土	弥生土器	壺	口縁	－	－	[3.2]	ナデ	摩滅	7.5YR5/6明褐	10YR5/4にぶい黄褐	普　1mm以下の石英・長石・角閃石・赤色粒を含む	良	
70	埋土	弥生土器	高杯	底部	－	－	[1.5]	ナデ後摩滅	摩滅	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR6/4にぶい橙	普　2mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	
71	埋土	弥生土器	高杯	脚部	－	－	[4.1]	ナデ、指押さえ	ナデ、絞り痕	10YR8/3浅黄橙	10YR3/1黒褐	普　1mm以下の石英・長石を含む	良	
72	埋土	弥生土器	高杯	口縁	－	－	[1.9]	摩滅	横ナデ	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	普　1mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	
73	埋土	弥生土器	高杯	口縁	－	－	[2.3]	摩滅	摩滅	7.5YR4/6褐	7.5YR6/4にぶい橙	普　1mm以下の赤色粒、4mm位以下の石英・長石を含む	良	
74	埋土	弥生土器	高杯	口縁	－	－	[3.0]	ナデ	ナデ	7.5YR5/6明褐	7.5YR5/6明褐	普　3mm以下の石英・長石・角閃石・赤色粒を含む	良	
75	埋土	弥生土器	高杯	口縁	－	－	[3.3]	摩滅	ナデ	7.5YR6/6橙	10YR6/4にぶい黄橙	普　1mm以下の石英・長石・角閃石・赤色粒を含む	良	
76	埋土	弥生土器	高杯	坏～脚部	－	－	[6.0]	分割ヘラミガキ、ナデ、摩滅	ヘラミガキ、摩滅	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR5/4にぶい褐	普　3mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒を含む	良	
77	埋土	弥生土器	高杯	坏～脚部	－	－	[4.5]	ナデ	ナデ	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/8橙	良　5mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	
78	埋土	弥生土器	高杯	脚部	－	－	[5.4]	指押さえ、ナデ	絞り後指ナデ	10YR8/4浅黄橙	7.5YR6/6橙	普　3mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	
79	埋土	弥生土器	不明	底部	－	(5.7)	[3.5]	ナデ	ナデ	10YR7/4にぶい黄橙	10YR6/1褐灰	普　1mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	粘土接合痕
80	埋土	弥生土器	不明	体部	－	－	[5.7]	ナデ、円形浮文2個、沈線10条	摩滅	7.5YR8/4浅黄橙	10YR8/2灰白	普　2mm以下の石英・長石を含む	良	
81	埋土	弥生土器	不明	体部	－	－	[2.9]	ナデ、貼付突帯	ナデ	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	普　2mm以下の石英・長石を含む	良	
82	埋土	弥生土器	不明	体部	－	－	[3.8]	刺突文、櫛描沈線8条	摩滅	5YR6/8橙	5YR7/8橙	普　2mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	
83	埋土	弥生土器	不明	体部	－	－	[3.6]	摩滅、貼付突帯	摩滅	10YR8/3浅黄橙	10YR8/2灰白	普　3mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	
84	埋土	弥生土器	壺or甕	口縁	－	－	[1.6]	摩滅、沈線2条	ヨコナデ	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR6/6橙	普　2mm以下の石英・長石を含む	良	
85	埋土	弥生土器	甕？	口縁	－	－	[3.4]	摩滅	摩滅	10YR5/4にぶい黄褐	7.5YR5/6明褐	普　1mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒を含む	良	
86	埋土	須恵器	杯身	口縁	－	－	[3.9]	回転ナデ	回転ナデ	N5/灰	N7/灰白	精良　0.5mm以下の石英・長石を含む	良	
87	埋土	須恵器	杯身	口縁	－	－	[1.9]	回転ナデ	回転ナデ	N5/灰	N5/灰	普　1mm以下の石英・長石を含む	良	
88	埋土	須恵器	杯身	口縁	(13.4)	－	[2.1]	回転ナデ	回転ナデ	N6/灰	N5/灰	普　2mm以下の石英・長石を含む	良	

表 4　遺物観察表④

SR1002（第2調査区）　土器一覧

遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
89	埋土	須恵器	杯身	口縁	－	－	[2.5]	回転ナデ、回転ヘラ削り	回転ナデ	N5/灰	N5/灰	普　1mm以下の石英・長石を副m	良好	
90	埋土	須恵器	蓋	口縁	－	－	[2.6]	回転ナデ	回転ナデ	N5/灰	N5/灰	普　1mm以下の石英・長石を含む	良	
91	埋土	須恵器	甕	口縁	－	－	[2.3]	回転ナデ	回転ナデ	5Y6/1灰	5Y6/1灰	普　1mm以下の石英・長石を含む	良	
92	埋土	須恵器	不明	体部	－	－	[3.4]	格子目叩き	ナデ、工具痕	N6/灰	N6/灰	精良　微細な石英・長石含む	良好	黒斑有
93	埋土	須恵器	不明	体部	－	－	[6.7]	平行叩き	当て具痕（青海波）	N4/灰	N4/灰	普　2mm以下の石英・長石を含む	良好	

SR1002（第2調査区）　石器一覧

遺物番号	出土遺構	種別	石材	法量				備考
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
94	埋土	石鏃	サヌカイト	[2.4]	2.0	0.2	1.2	凹基式、刃部鋸歯
95	埋土	石鏃		[1.4]	[1.55]	0.3	0.4	凹基式
96	埋土	石鏃	サヌカイト	4.4	1.4	0.55	3.50	凸基Ⅰ式
97	埋土	スクレイパー	サヌカイト	3.0	4.4	0.65	11.30	使用痕有、打製包丁からの転用の可能性有
98	埋土	石錐	サヌカイト	4.4	5.7	0.65	11.60	
99	埋土	石核	サヌカイト	6.4	6.1	1.3	82.6	
100	埋土	剥片	サヌカイト	6.8	5.4	1.7	98.1	一部二次加工有
101	埋土	剥片	サヌカイト	4.5	3.7	0.75	15.50	二次加工有
102	埋土	剥片	サヌカイト	2.85	5.7	0.7	8.4	微細剥離痕有

SK1014（第2調査区）　土器一覧

遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
103	埋土	弥生土器	甕	口縁	－	－	[4.4]	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR7/4にぶい黄橙	10YR8/3浅黄橙	普　3mm以下の砂粒を含む	良	
104	埋土	弥生土器	甕	口縁	－	－	[2.3]	ヨコナデ、沈線3条	ヨコナデ	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	普　2.5mm以下の石英・長石を含む	良	接合痕有 瀬戸内型甕

SK1016（第2調査区）　土器一覧

105	埋土	弥生土器	甕	底部～体部	－	(6.6)	[13.0]	ナデ、摩滅	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐	2.5Y6/3にぶい黄	粗　5mm以下の石英・長石を含む	良	
106	埋土	弥生土器	甕	完形	23.6	6.3	19.9	ナデ、工具痕	ナデ	5YR6/6橙	5YR6/8橙	普　4mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	外面:煤付着 瀬戸内型甕
107	埋土	弥生土器	甕	口縁～体部	(22.7)	－	[14.4]	ヨコナデ、ハケ目	ヨコナデ、指押さえ	10YR5/4にぶい黄褐	10YR4/4褐	普　5.5mm以下の砂粒、5mm以下の石英・長石、1mm以下の赤色粒を含む	良	外面:黒斑有
108	埋土	弥生土器	甕	口縁～体部	(9.8)	－	[14.4]	ナデ	ナデ、指頭圧	10YR6/4にぶい黄橙	10YR6/3にぶい黄橙	粗　6mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	内・外面:黒斑有
109	埋土	弥生土器	甕	口縁～体部	(18.0)	－	[12.5]	ヨコナデ	ナデ	10YR4/4褐	10YR6/2灰黄褐	粗　4mm以下の石英・長石、3mm位以下の赤色粒を府k無	良	黒斑有
110	埋土	弥生土器	甕	口縁	(22.6)	－	[6.2]	ヨコナデ、櫛描直線文6本1束4条	ヨコナデ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	普　3mm以下の石英・長石、2mm以下の赤色粒を含む	良	
111	埋土	弥生土器	甕	口縁	－	－	[6.5]	櫛描直線文4条1束3条、横ナデ	ヨコナデ	7.5YR6/3にぶい褐	7.5YR6/4にぶい橙	普　4mm以下の石英、8mm以下の長石を含む	良	
112	埋土	弥生土器	甕	口縁	－	－	[2.2]	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR7/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	普　3mm以下の長石、4mm以下の石英を含む	良	

遺構検出（第2調査区）　土器一覧

遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
113	遺構検出	弥生土器	甕	底部	－	4.8	[4.5]	ナデ、摩滅	ナデ、摩滅	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	粗　6mm以下の石英・長石・赤色粒を多量に含む	良	
114	遺構検出	須恵器	杯身	底部	(13.0)	(9.2)	[3.5]	回転ナデ、回転ヘラ切り	回転ナデ	N7/灰白	N7/灰白	普　3mm以下の石英を含む	良	

表５　遺物観察表⑤

包含層（第3調査区）　土器一覧

遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
116	遺物包含層	弥生土器	壺？	口縁	－	－	[3.2]	ヨコナデ、貼付突帯1条、縦ハケ、沈線1条	摩滅	5YR5/6明赤褐	7.5YR7/4にぶい橙	普　2.5mm以下の石英・長石を含む	良	瀬戸内型甕

SK2003（第2調査区）　土器一覧

遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
115	埋土	弥生土器	壺？	口縁	－	－	[2.8]	刻目、摩滅	摩滅	5YR7/6橙	5YR7/6橙	普　4mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	

遺構検出時（第3調査区）　土器一覧

116	遺構検出	弥生土器	壺？	口縁	－	－	[1.1]	ヨコナデ	ヨコナデ	7.5YR5/6明褐	2.5Y4/1黄灰	普　1mm以下の赤色粒、2mm位以下の長石、5mm以下の石英を含む	良	

SR1002（第4調査区）　土器一覧

遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
118	第6層	弥生土器	甕	口縁～体部	(14.7)	－	[8.3]	ナデヨコナデ、刻目、沈線3条	ナデ、板ナデ	10YR6/2灰黄褐	10YR6/2灰黄褐	普　4.5mm以下の石英、3mm以下の長石を含む	良	外面：煤付着
119	第6層	弥生土器	壺	口縁～体部	(8.2)	－	[6.1]	ナデ、沈線6条	ナデ、板ナデ	10YR6/2灰黄褐	10YR5/3にぶい黄褐	普　4mm以下の長石・赤色粒を含む	良	
120	第6層	弥生土器	壺	口縁	(11.3)	－	[6.3]	指頭圧、ナデ	ナデ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	粗　5mm以下の石英・長石を含む	良	
121	第6層	弥生土器	壺	口縁	(18.0)	－	[6.0]	ナデ、指頭圧、ハケ目	ナデ	2.5Y6/3にぶい黄	2.5Y6/3にぶい黄	普　3mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	内面・口縁：煤付着
122	第6層	弥生土器	壺	体部	－	－	[6.7]	ナデ、沈線3条、摩滅	ナデ、摩滅	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	普　5mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	
123	第6層	弥生土器	壺	底部	－	(10.0)	[2.3]	ナデ摩滅	ナデ、摩滅	2.5YR4/6赤褐	2.5YR4/6赤褐	粗　4mm以下の石英・長石を含む	良	
124	第6層	弥生土器	不明	口縁	－	－	[2.9]	ナデ、摩滅	ナデ、摩滅	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	普　3mm以下の石英・長石を含む	良	外面：煤付着
125	埋土	弥生土器	甕	底部	－	(8.6)	[5.6]	ナデ、指頭圧	ナデ	2.5Y5/2暗灰黄	10YR6/2灰黄褐	粗　6mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	
126	埋土	弥生土器	甕	底部	－	(8.2)	[3.1]	ナデ、横ナデ	ナデ	10YR8/2灰白・7.5YR8/2灰白	7.5YR8/2灰白・N6/0灰	普　1mm以下の赤色粒、3.5mm以下の砂粒を含む	良	
127	埋土	弥生土器	甕	底部	－	(4.6)	[1.7]	ナデ	ナデ	10YR7/3にぶい黄橙	2.5Y3/1黒褐	普　2mm程度の角閃石、3mm以下の長石を含む	良	
128	埋土	弥生土器	甕	体部	－	－	[4.2]	ナデ	ナデ、板ナデ、横ハケ	2.5Y7/3浅黄	2.5Y4/1黄灰	普　0.5mm以下の金雲母、3mm以下の石英・長石を含む	良	
129	埋土	弥生土器	甕	口縁	－	－	[3.3]	ハケ目、ヨコナデ	ヨコナデ	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR6/4にぶい橙	普　3mm以下の長石、4mm以下の赤色粒を含む	良	
130	埋土	弥生土器	甕	口縁	(12.0)	－	[2.9]	ナデ、摩滅	ナデ、摩滅	10YR5/4にぶい黄褐	10YR5/4にぶい黄褐	普　3mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	
131	埋土	弥生土器	甕	口縁～体部	－	－	[14.3]	指頭圧後ナデ	ナデ	10YR6/2灰黄褐	2.5Y7/2灰黄	普　5mm以下の石英・長石を多量に含む	良	瀬戸内型甕
132	埋土	弥生土器	壺	底部	－	(11.0)	[3.3]	ナデ、摩滅	ナデ、摩滅	10YR7/2にぶい黄橙	10YR6/2灰黄褐	普　5mm以下の石英・長石・赤色粒を多量に含む	良	
133	埋土	弥生土器	壺	底部	－	(8.0)	[4.3]	ナデ、板ナデ	ハケ後板ナデ	2.5Y7/2灰黄	2.5Y6/2灰黄	普　2mm以下の赤色粒、6mm以下の砂粒を含む	良	
134	埋土	弥生土器	壺	体部	長さ[4.2]	幅[5.0]	厚さ1.9	押圧突帯文、摩滅、粘土接合痕	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	2.5Y6/3にぶい黄	普　4mm以下の石英・長石を含む	良	
135	埋土	弥生土器	甕	口縁	－	－	[2.7]	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR8/2灰白	2.5Y8/2灰白	普　0.5mm以下の黒雲母・赤色粒、3mm以下の長石を含む	良	
136	埋土	弥生土器	壺	口縁	－	－	[1.8]	ナデ、摩滅	ナデ、摩滅	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	普　5mm以下の長石・赤色粒を含む	良	
137	埋土	弥生土器	甕	口縁	(16.0)	－	[3.7]	ナデ、摩滅	ナデ	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR5/4にぶい褐	普　2mm以下の石英・長石を含む	良	
138	埋土	弥生土器	高杯	脚部	－	(22.6)	[2.4]	ナデ	ナデ、指押さえ	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR5/6明褐	普　1mm以下の角閃石、4.5mm以下の砂粒、2.5mm以下の赤色粒を含む	良	
139	埋土	弥生土器	高杯	脚部	－	－	[2.6]	ナデ、摩滅	ナデ、摩滅	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR6/6橙	普　2mm以下の長石・赤色粒を含む	良	
140	埋土	弥生土器	高杯	脚部	－	－	[3.3]	ナデ、摩滅	ナデ、摩滅、指押さえ	2.5Y6/2灰黄	2.5Y6/2灰黄、7.5YR5/4にぶい褐	普　2mm以下の石英・長石を含む	良	円盤充填
141	埋土	弥生土器	高杯	坏～脚部	－	－	[3.3]	ヘラミガキ、摩滅	摩滅	5YR6/6橙	5YR6/6橙	普　6mm以下の石英を含む	良	
142	埋土	弥生土器	高杯	坏～脚部	－	－	[5.1]	ヨコナデ	ナデ、指押さえ	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	普　3mm以下の赤色粒、4mm以下の長石、3.5mm以下の黒色粒を含む	良	
143	埋土	須恵器	杯身	底面	－	(8.0)	[1.7]	回転ナデ	回転ナデ	5YR5/3にぶい赤褐	5YR6/2灰褐	普　2mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	
144	埋土	須恵器	甕	口縁	(13.9)	－	[5.8]	ナデ、ヨコナデ、摩滅	ヨコナデ、摩滅	10Y6/1灰	10Y6/1灰	普　2mm以下の赤色粒、3mm以下の長石を含む	良	

表 6　遺物観察表⑥

SR1002（第5調査区）　土器一覧

遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
145	埋土	弥生土器	甕	底部	－	(4.1)	[2.6]	ナデ、摩滅	ナデ、摩滅	2.5Y7/2灰黄	2.5Y7/2灰黄	普 3mm以下の石英・長石・黒色粒を含む	良	
146	埋土	弥生土器	甕	底部	－	(9.7)	[4.3]	ナデ、ハケ目	ナデ	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/2灰白	普 2mm以下の赤色粒、4mm以下の石英・長石・砂粒を含む	良	外面:黒斑有
147	埋土	弥生土器	甕	口縁	(14.3)	－	[3.7]	ナデ、摩滅	ナデ、摩滅	10YR6/2灰黄褐	10YR5/3にぶい黄褐	普 1mm程度の石英・長石・金雲母を含む	良	
148	埋土	弥生土器	甕	口縁	(7.3)	－	[2.9]	ナデ、摩滅	ナデ、指頭圧、摩滅	10YR5/6黄褐	10YR6/6明黄褐	普 1mm以下の石英・長石、3mm以下の角閃石を含む	良	
149	埋土	弥生土器	高杯	坏身～脚部	－	－	[2.8]	ナデ、摩滅	ナデ、摩滅	5YR5/1褐灰	5YR5/6明赤褐	普 1mm程度の石英・長石を含む	良	
150	埋土	弥生土器	高杯	坏身	(23.7)	－	[4.3]	ヨコナデ、ヘラミガキ	ヨコナデ	10YR5/3にぶい黄褐	7.5YR6/4にぶい橙	普 1mm以下の金雲母・角閃石、2mm以下の長石を含む	良	
151	埋土	弥生土器	高杯	坏身	(12.4)	－	[2.9]	ヨコナデ、摩滅	ヨコナデ	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR5/4にぶい褐	普 2mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良	
152	埋土	須恵器	杯身	底部	－	(10.4)	[1.8]	回転ヘラ削り、回転ナデ	回転ナデ	2.5Y7/1灰白	5Y6/1灰	普 2mm以下の石英・長石を含む	良	
153	埋土	須恵器	杯身	口縁	－	－	[2.2]	回転ナデ	回転ナデ	N6/灰	N7/灰白	普 0.5mm以下の黒色粒、1mm以下の長石を含む	良	
154	埋土	須恵器	壺	口縁	(15.4)	－	[4.2]	回転ナデ、波状文	回転ナデ	N4/灰	N4/灰	普 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
155	埋土	須恵器	堤瓶	体部	－	－	[5.0]	回転ヘラ削り、回転ナデ	回転ナデ	10YR7/1灰白	N5/灰	普 1.5mm以下の石英・長石を含む	良	

SR1002（第5調査区）　石器一覧

遺物番号	出土遺構	種別	石材	法量				備考
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
156	埋土	石鏃	サヌカイト	3.1	2.0	0.6	3.6	

SK1017（第5調査区）　土器一覧

遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
157	埋土	弥生土器	甕	体部	－	－	[13.2]	ハケ目	指ナデ、指押さえ	7.5YR4/3褐	7.5YR5/3にぶい褐	普 3mm以下の石英・長石を含む	良	
158	埋土	弥生土器	甕	口縁	－	－	[1.7]	ナデ	ナデ	5YR6/6橙	5YR5/6明赤褐	普 1mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	

SK1018（第5調査区）　土器一覧

遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
159	埋土	弥生土器	甕	体部	－	－	[9.0]	縦ハケ	指押さえ	5YR4/6赤褐	10YR5/1褐灰	普 3mm以下の石英・赤色粒を含む	良	

包含層2（第5調査区）　土器一覧

遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
160	埋土	弥生土器	甕	底部	－	(8.2)	[6.6]	ハケ目、ナデ	摩滅	5YR5/6明赤褐	2.5Y7/3浅黄	普 3mm以下の石英・長石・黒色粒を含む	良	外面:黒斑有

遺構検出時（第5調査区）　土器一覧

遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
161	清掃中	弥生土器	甕	口縁	－	－	[3.8]	摩滅、沈線3条(摩滅気味)	摩滅	7.5YR8/3浅黄橙	7.5YR8/3浅黄橙	普 3mm以下の石英・長石を含む	良	接合痕有

表採　土器一覧

遺物番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
162	表採	弥生土器	甕	底部	－	(6.7)	[4.9]	ナデ、ハケ目	摩滅	7.5YR7/6橙	7.5YR6/6橙	普 3mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒を含む	良	底・体部:黒斑有

写 真 図 版

写真図版 1

1　第１調査区１面目（東から）

2　ＳＫ 1002 断面（南から）

3　ＳＫ 1002 全景（南から）

4　ＳＫ 1008 断面（南から）

5　ＳＫ 1009 断面（南から）

6　ＳＫ 1012 遺物出土状況（北から）

7　ＳＫ 1012 断面（北から）

8　ＳＫ 1012 完掘（北から）

1　ＳＰ 1001 断面（ 北から ）

2　ＳＰ 1003 断面（ 南から ）

3　ＳＰ 1003 完掘（ 南から ）

4　ＳＨ 1001 全景（ 南から ）

5　第１調査区２面目全景（ 西から ）

6　ＳＤ 2001 断面（ 南から ）

7　ＳＤ 2001 完掘（ 西から ）

8　ＳＫ 2001 完掘（ 北から ）

写真図版 3

1　第１調査区Ａ－Ａ’断面（ 北から ）

5　第２調査区ＳＲ 1002 完掘（ 南東から ）

2　第２調査区１面目（ 西から ）

6　ＳＫ 1014 断面（ 南から ）

3　ＳＲ 1001 完掘（ 南から ）

7　ＳＫ 1016 断面（ 北から ）

4　第２調査区ＳＲ 1002 断面（ 北から ）

8　ＳＫ 1016 遺物出土状況

1　ＳＫ 2003 完掘（ 北東から ）

5　ＳＰ 1017 完掘（ 南から ）

2 第２調査区Ｃ－Ｃ’断面（ 西から ）

6　第３調査区３面目全景（ 西から ）

3　第３調査区１面目（ 西から ）

7　第４調査区１面目全景（ 北から ）

4　第３調査区包含層１断面（ 南から ）

8 第４調査区土層（ 西から ）

写真図版 5

1　第４調査区ＳＲ 1002 完掘（ 南東から ）

2　ＳＫ 1017 遺物出土状況

3　ＳＫ 1017 完掘（ 北から ）

4　第５調査区包含層１完掘（ 北から ）

5　第５調査区Ｄ－Ｄ’断面（ 東から ）

1　ＳＫ 1002 出土遺物

5　ＳＲ 1002 第４層出土遺物

2　ＳＲ 1002 弥生土器甕①

6　ＳＲ 1002 石器・須恵器

3　ＳＲ 1002 第６層出土遺物

7　ＳＲ 1002 弥生土器甕②

4　ＳＲ 1002 弥生土器

8　ＳＫ 1001 出土遺物

1　ＳＫ 1016 弥生土器　甕

2　出土遺物一括

3　焼成破裂を受けた土器片

報　告　書　抄　録

ふりがな	たひみやじりいせき
書名	多肥宮尻遺跡
副書名	テニスクラブ建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第195集
編著者名	香川　将慶・益﨑　卓己
編集機関	高松市教育委員会
所在地	〒760－8571　香川県高松市番町一丁目8番15号　　TEL087－839－2660
発行年月日	西暦2018年6月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	発掘期間	調査 面積	発掘 原因
たひみやじりいせき 多肥宮尻遺跡	たかまつし 高松市 たひかみまち 多肥上町	37201		34° 17′ 32″	134° 3′ 37″	2017.4.24 ～ 2017.5.17	594㎡	テニスクラブ 建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
多肥宮尻遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴建物跡 流路跡 溝跡 土坑 ピット 遺物包含層	弥生土器 須恵器 石器	土器焼成土坑？

要約	弥生時代前期後半と古代にかけて埋没した流路跡を確認した。弥生時代前期後半から前期末頃の土坑を複数検出した。また、弥生時代前期後半頃の土器焼成土坑と考えられる土坑を確認した。

高松市埋蔵文化財調査報告第195集

多肥宮尻遺跡

平成30年6月29日

編　集　　高松市教育委員会
　　高松市番町一丁目８番１５号
発　行　　高松市教育委員会
印　刷　　有限会社 河端商会